

第2図 藏元・法光寺・中満遺跡 調査区位置図 (1:5000)



第3図 藏元遺跡 調査区配置図 (1:800)

構のつながりを確認することができなかった。

## 2. 包含層の状況

基本層序は、先述したとおりである（第1図）。

事前の県文化課による試掘調査の際、黒色土より中世の遺物が出土していたことで、調査開始時の重複による表土剥ぎ取り作業では、黒色土が中世の包含層であることに留意しながら立ち会った。

黒色土の残る厚さは一定しておらず、北端部では20cm前後なのに対して、A区 S D16以南～S K13の区画では、耕作土直下にアカホヤがある。S K14のある付近だけは南北から緩やかに50cmほど落ちる地形で黒色土が残るが、遺物は含まれない。

A区 S D1以南～S D5の、遺構が集中する範囲では、調査区境界で観察されるアカホヤ直上の黒色土（厚さ15～20cm）は、全体にアカホヤ粒を含んでいる部分が多く、III層の欠ける部分もある。このことは、この範囲にアカホヤ面に達しない浅い遺構があるなど人為的な擾乱部分が多くあることを伺わせる。この部分では、往時の生活面がアカホヤに近いレベルにあったのかもしれない。

## 3. 検出した遺構と遺物

戦元跡で検出した遺構は以下のとおりである。

竪穴状遺構	1基 (SA 1)
掘立柱建物	1軒 (SB 1)
土坑	14基 (SK 1～9, 11～16)
粘土探査土坑	4基 (SK 10・17～19)
溝状遺構	21条 (SD 1～21)
ピット(遺構外)	491個
石組遺構	1基
性別不明の遺構	1基 (SZ 1)

このうち、掘立柱建物1軒と溝状遺構3条 (SD 19～21)、ピット21個はB区で、他はA区で検出されたものである。

遺構・遺物の時期は中世を中心とし、近世までのものが検出された。

遺構内の遺物は概して少なく、遺構は時期を確定できないものも少なくない。

戦元跡で出土した遺物の量はコンテナ約4箱分で、うちB区の遺物は、表土中より陶磁器片など9点と、PP 9から磁器片2点と磨製石器？片1点(44)が出土したのみで、他はすべてA区出土である。

以下、各遺構と遺物について述べる。

なお、各遺構の検出面での規模や埋土、出土遺物など特記すべき事項については第1・2表に示している。

## 掘立柱建物 (SB 1, 第5図)

SB 1は、桁行が5間で梁行が西面1間、東面2間の掘立柱建物である。東面の3穴は直線上に並ばず、粗雑な作りになっている。主軸はほぼ東西方向に合致する。

形態はかなり東西に長い形になっているが、中央にあるピットがSB 1の柱穴だとすると、3間×1間と2間×2間の建物が連結していると見ることもできる。西側が住居で東が納屋、といった建物の機能上の分別があつたのかもしれない。

遺物は出土しなかった。

## ピット群

掘立柱建物に関連して、A区のピット群について述べておく。

A区では、ピット470個が検出されたが、柱穴が多数重なり合っていることと、調査区の幅が狭いことから全容がつかめず、確証をもって掘立柱建物と判定できるものはなかった。

3～4個の柱穴が等間隔に並ぶなど、掘立柱建物の一部を思わせる箇所が数ヶ所見られるが、これらの中には構造的施設が含まれる可能性もある。

一部のピット壁面には、水平断面が三角～半円型の垂直方向に掘り削られた「掘り具」の痕跡とみられる筋状の凹みが幾筋も観察された。こうした所見は、法光寺遺跡でも確認されている。

## 竪穴状遺構 (SA 1, 第5図)

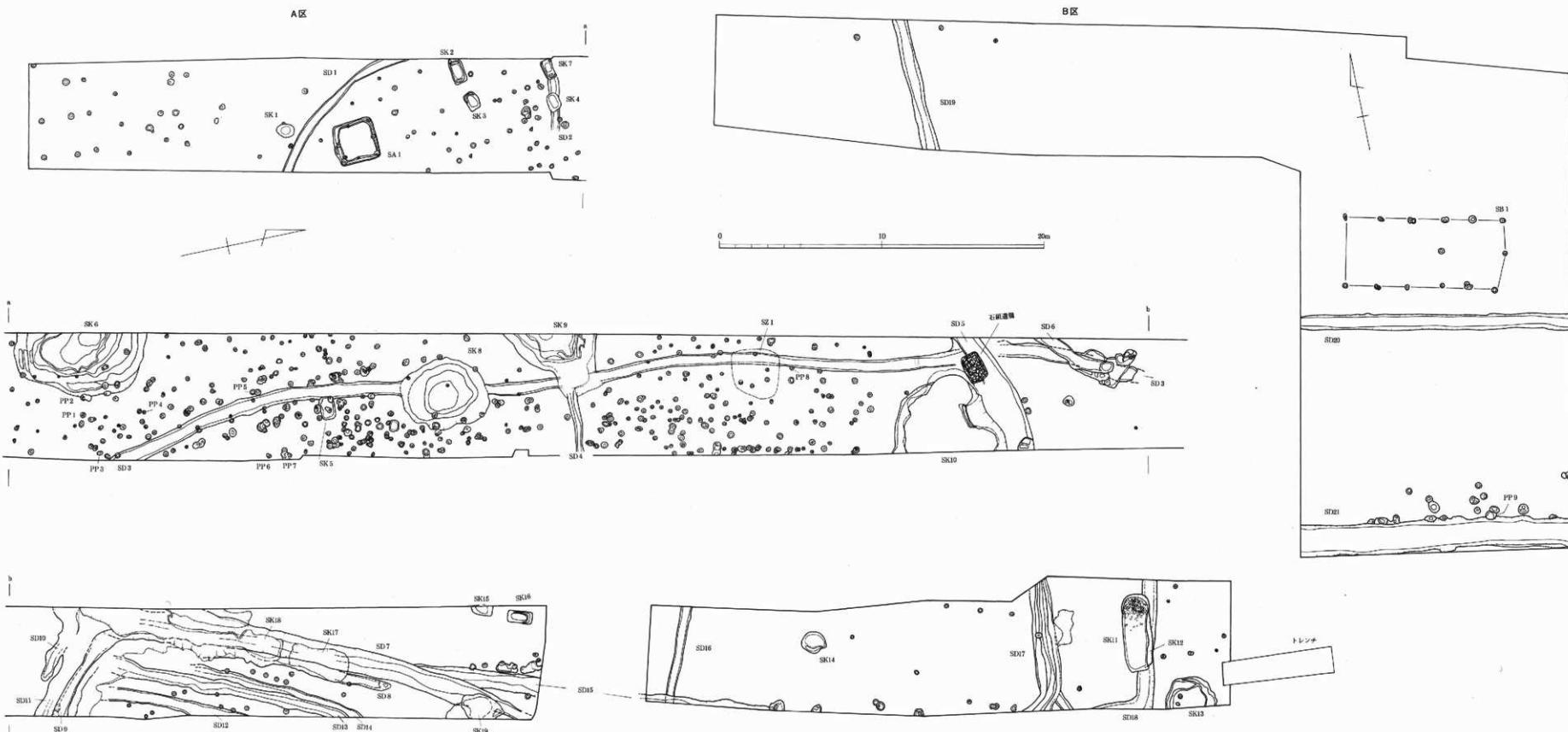
SA 1は、A区北部で検出された竪穴状遺構である。

その形状は、一辺2.40mの方形で、四周に壁帯溝がめぐる。北辺中央西寄りの位置には、出入り口と思われる段差が設けられている。

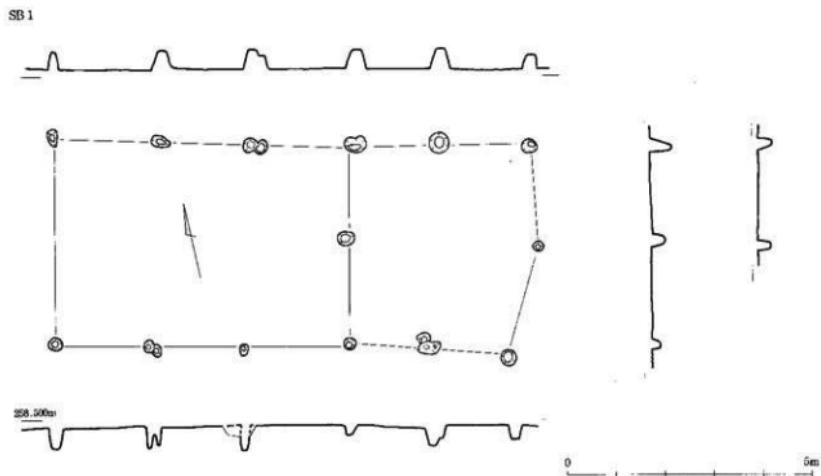
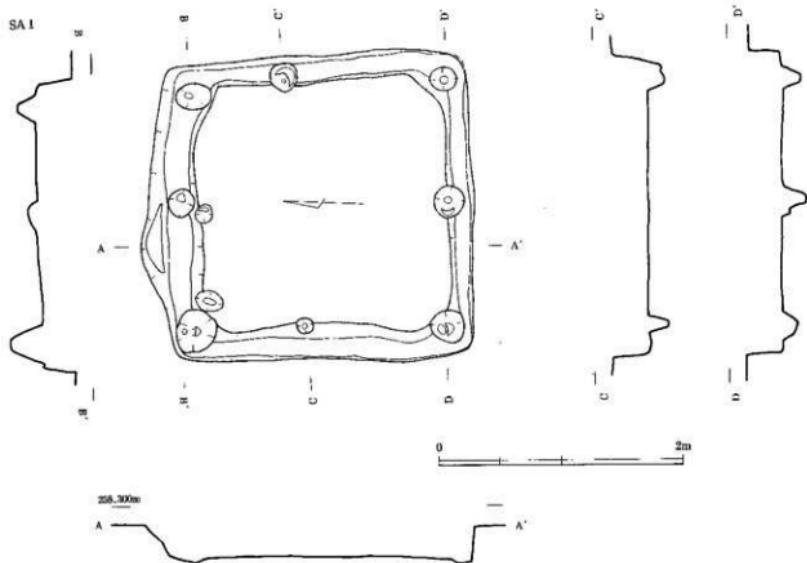
遺構内には、ピット8個が壁帯溝の内部や内側寄りの四隅と各辺の中央に1個ずつ配され、いずれも深さ15～20cmと浅い。

埋土はアカホヤや皿層黄褐色土の比較的大きなプロックを全体に多く含む黒色土で、人為的に一度に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、埋土中から陶器片(23)と鉄器(43)が出土した。23は甕胴部と考えられるが、SK 6出土の破片と接合したものである。両遺構の時期や、埋め戻した上の供給源を考える上で重要な事実である。



第4図 藏元遺跡 遺構分布図 (1/200)



第5図 藏元遺跡 SA 1 (1/40)、SB 1 (1/100) 実測図

第1表 蔵元遺跡検出遺構(堅穴状遺構・土坑)一覧

遺構名	形 状	検出面での規模(m) <sup>※</sup>			埋 土	出 土 遺 物	特 記 事 項
		最大長	最大幅	最大深		土器器陶磁器	
S A 1	方形堅穴	2.70	2.40	0.33 (ピット 0.20)	黒色土とアカホヤ ブロック混在 (一度に埋め戻し)	甕? 片陶鉢 瓦?	堅帯構と一刃3基のピットを持つ。 北辺中央が入口か。 遺物は床面上約30cmのレベルで出土し、埋め戻し土中に混じたもの。
S K 1	円形	1.10	0.76	0.18	黒色土にアカホヤブロッ ク少混		
S K 2	長方形	1.62	0.78	0.61	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック少混		
S K 3	長方形	1.12	0.70	0.61	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック少混	口縁①	
S K 4	長方形	1.04	0.76	0.69	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック多混。皿層 ブロック少混	小 口 13	上部の一部を S D 2 に切られている。
S K 5	長方形	1.52	0.86 (ピット 0.10)	0.26	黒色土にアカホヤ粒少 混	場 底① 底部片 2 不明片 1	青磁盤④ 燒粘土塊 1
S K 6	円形	〈8.03〉	-	0.72	黒色土に アカホヤ粒~ブロック 少混	環底部④ 底部片 4 不明片 5	出土陶磁片(甕?)は S A 1 のもの と接合。
S K 7	長方形	1.20	0.52	0.92	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック。皿層ブロッ ク少混		I部の一部を S D 2 に切られている。
S K 8	円形	5.62	4.06 (ピット 0.55)	0.36	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック少混	底部片 3 不明片 4	上部器底部は糸切り離し
S K 9	不整円形	〈5.76〉	-	1.03	(第9回参照) 黒色土にアカホヤ粒~ ブロック混	盤片⑩ 青磁碗⑨ 底部片 2 不明片 3 陶器片 1	青磁碗⑨ 底部片 2 不明片 3 陶器片 1
S K 10	不整円形 袋状	〈7.13〉	-	0.80	盤片が各上層のブロ ックが混在。埋め戻しの 状況	青磁碗⑤ 青磁片 1 當滑? 1 麻摩? 2	粘土採掘用の土坑か
S K 11	長円形	(3.56)	1.14	0.43	灰褐色土 細砂含む。	盤片? 底 2 柴付 1 柴付 盤片 1	近代の土坑か
S K 12	長円形	(4.46)	1.62	0.54	暗褐色土 細砂・炭化物 多く含む	盤底片 1 盤片 1 柴付 1 柴付 盤片 1	東端部には焼磚と炭化物が充填され ている。中央~西部は S K 11 に切ら れているため不明。
S K 13	不整円形	3.08	-	0.40	灰褐色土 細砂含む	盤底片 1 盤片 2 柴付 1 柴付 盤片 1	近代の土坑。 近代の角瓶器多数出土。
S K 14	円形		1.54	1.30	0.69	灰褐色土 アカホヤ小ブロック混	
S K 15	長方形		1.38	(0.78)	0.64	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック。皿層小 ブロック少混	
S K 16	長方形		1.62	0.70	0.97	黒色土にアカホヤ粒~ 小ブロック混。皿層小 ブロック少混	
S K 17	不整長方形 袋状		3.78	1.88 袋部2.34	0.77	黒色土・アカホヤ・褐 色土・白色土の各ブロ ック混在	粘土採掘用土坑か
S K 18	不整形 一部袋状		(2.70~)	〈1.52〉	〈0.46〉	黒色土・アカホヤ・褐 色土・白色土の各ブロ ック混在	粘土採掘用土坑か。 北部立ち上がり焼窯は確認されず。 西端部が削ぎ落とし状況か。
S K 19	不整円形		2.68	〈0.85〉	〈0.65〉		

\* < > は現存値、( ) は推定値。出土遺物の○印番号は検出中の遺物番号。出土遺物数量は破片数。

第2表 藏元遺跡遺物一覽

遺構名	検出レベル(m)	検出面での規模(m)			出土遺物			特記事項
		長さ	最大幅	最大深	土師器	陶磁器	他	
S D 1	258.13	10.6	0.60	0.11				
S D 2	256.78	3.1	0.68	0.10				
S D 3	北西端 258.08～ 南端 257.73	64.4	1.15	0.24	环底部④ 底 部 不 明 片	白 磁 碗 鉢 片 鉢 片	白 磁 碗 鉢 片 鉢 片	出土上部等は赤色 SD 5 切り合いで堆積面低い(257.65m)ため中 断。SD 5との先後関係不明。
S D 4	257.76	3.7	0.56	0.23	⑧ 不明片 1	鑿 鉢片 1		S K 9 と連携? 堆積片は SD 3 と同一個体 ⑧は SD 3 との交差部より出土。
S D 5	東端 257.65～ 西端 257.77	8.4	1.25	0.22				北側遺構境界はっきりしない。
S D 6	257.82	5.3	0.95	0.33 (南端部) (0.60)			鉄片 ? 1	南端部にピット状落ち込みあり。 SD 3 に切られている。
S D 7	S K 18付近 257.60～ 南端257.50 中央257.42	23.6 ～?	1.50	0.54	底 部 片 5 小 片 7		鉄 片 1	北端部の形状不明
S D 8	北端 257.53～ 南端 257.47	10.4	0.62	0.04 (南端部) (0.17)				南端部落ち込みあり。 北端部は崩落のため不明。
S D 9	西端 257.42	6.3	0.94	0.27		吸 器 片 1		SD 8 と同一遺構か。 西端部最も深い。
S D 10	257.74 東端 257.65	2.5 ～?	0.86	0.22	不明片 1	碗 口 縁 ⑨		東部の形状不明
S D 11	西端 257.82～ 東端 257.43	4.8 ～?	1.05	0.30				西端部トレンチのみの確認。以降も一部トレント のみ掘下げるものの検出面低いため全容つかめず。
S D 12	北端 257.73～ 西南端 257.77	8.7	0.88	0.07				
S D 13	北東端 257.58～ 西南端 257.54	14.6	0.92	0.15				SD 3 と同一遺構か。
S D 14	北東端 257.59～ 西南端 257.56	10.4	0.78	0.10				
S D 15	北端 257.42～ 南端 257.50	22.4	1.16	0.35				
S D 16	西端 257.47～ 東端 257.57	6.05	0.62	0.15				SD 15 よりも新しい。
S D 17	西端 257.93～ 東端 258.03	8.70	1.55	0.56 (テラス部) (0.44)				断面形は、中央が 稼低くなっている。 西端部は、SD 17 が 2 条の溝の切り合ったもので それが分岐しているのか、あるいは丘陵形の土壁 と切り合っているのか判別がつかなかった。
S D 18	258.00	10.95	1.07	0.34	薩摩指鉢② 薩 摩 鉢			西端部で、ほぼ直角に北方向へ折れ曲る。 SK 11・12 に切られている。
S D 19	257.64	8.46	1.02	0.48				
S D 20	西端 258.32～ 東端 258.41	16.7	0.95	0.23				全体的にトレッチャーによる擾乱・削削を受け ている。 SD 21 と平行に走る。
S D 21	258.22	16.7	1.80	0.58				西に向かって低くなる。底面東西レベル差10cm 断面形は台形、底面は標層。

### 土坑（第1表参照）

S K 2・3・4・5・7・15・16の7基（第6図）は、箱型の長方形の土坑である。

規模は幅0.7～0.8m、長さ1.1～1.6mと近似しており、埋土はどれも黒色土にアカホヤやⅢ層の小ブロックを含んでいる。

その中のS K 5は、深さ0.26mと比較的浅く、四隅も丸みを帯びる。遺構内に2ピットをもつが、これらは遺構表面でも土坑底面でも埋土の違いが確認されていなかったため土坑に属するものとした。ただし、埋土がすべて黒色土のため判別が困難なこと、周囲にピットが多く分布することを考えると、ピットが別時期のものである可能性も否めない。S K 5では、15世紀後半～16世紀中葉の稲作青磁皿片（第14図34）と糸切り離しの厚い底部（第13図1）などが出土している。ピット内で出土したものはないが、1は南東隅ピットの直上で、土坑底面より10cm上のレベルで出土した。

S K 5以外の6基は、深さ0.6m～1m近くと深く、二土坑ずつ長軸方向に並び、うち4基はテラス状の平坦面をもつなど共通点があることから、同時期の遺構と考えられるが、時期を決定づける遺物はない。S K 5との近似点を頼れば、同じく中世かと推定される。S K 4・7は上部を溝S D 2に切られているのでこれより以前だが、残念ながらS D 2は検出面での残存度があまりにも悪く、遺物も皆無で時期不明である。

以上7基の土坑の「用途」を知る手がかりは得られなかった。

S K 6・8・9（第7～9図）は円形大型で、階段状の平坦部をもちらがら「すり鉢」状に落ち込む土坑である。S K 6・9は縦溝まで掘り下げているが、S K 8はV溝までと浅く、平坦部が緩やかで、前二者とはやや形状に相違がある。

S K 8はS D 3と、S K 9はS D 3とS D 4の交差部にある落ち込みと、それぞれ切り合っているが、断面精査を念入りに行なったにもかかわらず、新旧関係が確認できなかった。二基とも、もともと溝に連結していた可能性もある。

S K 6は検出面での遺構掘り込み位置が明瞭ではなく、園化した範囲外の西側も、東に向かって皿状に緩やかに傾斜している。S K 6はS K 8とともに東半部の形状が不明なので全容がつかめないが、同様に東半部で溝（S

D 1か）と連結していることも想像できる。

S K 6内にはピット9個が検出されたが、あるいはこれらが土坑の用途に関連した簡単な施設のものである可能性も否めないので、ピットと土坑の同別・新旧がS K 5と同様判別できないものの、同一遺構に付帯するものとして扱っている。ピットの深さは、土坑の上端面にかかるいるものおよび近接しているものが30～35cm、内側に近い4個が北から28・18・22・24cmである。

以上の状況から、これら三つの土坑の用途には、「集水・貯水」も考えられるのではないだろうか。ただし、埋土には、それを裏付けるだけの所見は見い出せなかつた。このことに関連して、階段状の段差の付いた形状も「界障」が目的ということも考えられる。

また、時期については、S K 6の擂鉢片の存在やS K 9の青磁碗の年代から15世紀後半に近い時期と考えることもできる。

ちなみに、S K 6際のP P 2からは12世紀代とみられる土器器・皿が出土しており、S K 6とは別の時期のものである。

S K 11・12（第8図）は、長円形の土坑である。S K 11がS K 12を切っているのが断面で観察された。S K 12の東端部には焼穢が集積しており、疊間の土には炭化材片や焼土粒が多量に含まれる。S K 12中央～西部は切られているため本来の焼穢の範囲やどのような性格のものかは不明だが、本来、焼穢集積の部分は、円形の独立した別の遺構だったという可能性もあり得る。

時期については、2基に切られているS D 18で18世紀以降の薩摩焼片が出土しているので、その年代を遡ることはできない。2基とも遺物は薩摩焼や染付の小破片数点であった。

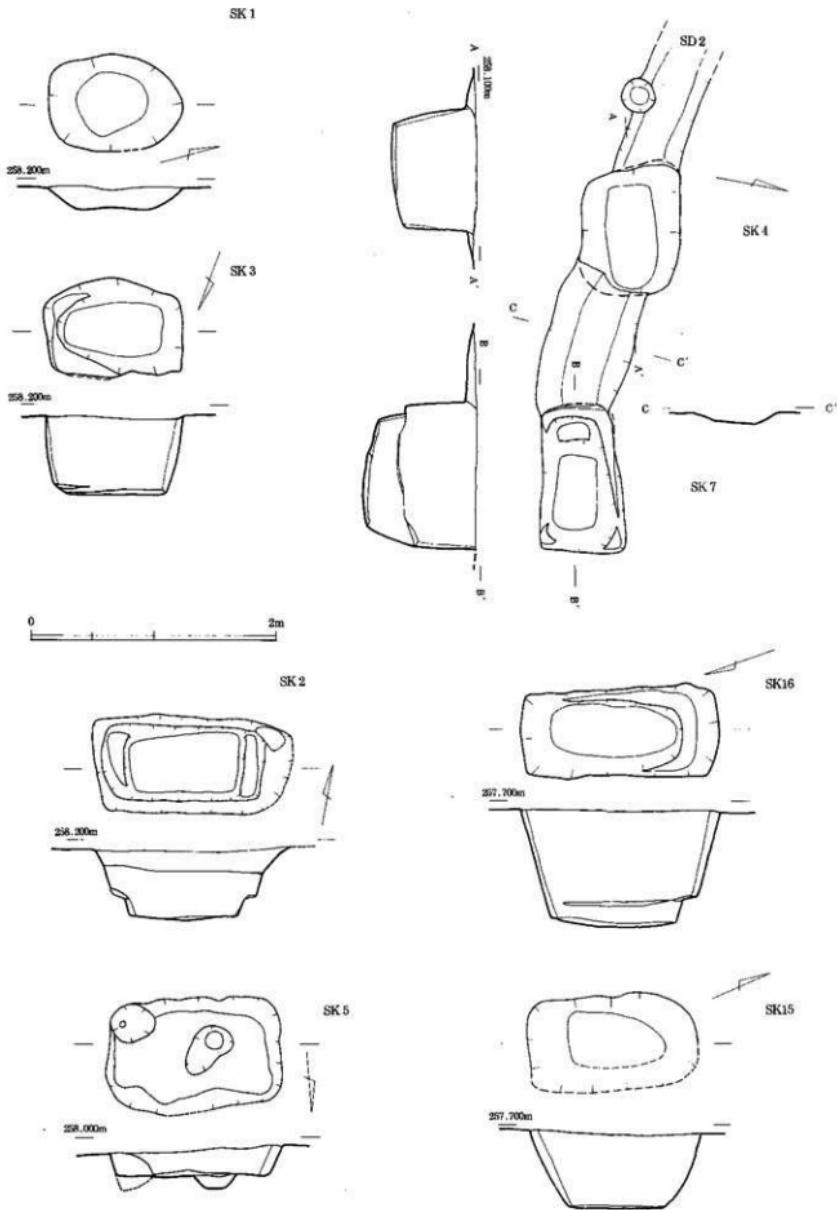
S K 13（第10図）は西半部を欠く不整円形の土坑で、陶磁器片が多く出土した。括弧乗用の土坑と思われる。埋土はS K 11・12と同じで、3基とも同時期のものであろう。遺物中には、16世紀後半～17世紀中頃の中田製染付皿片（37）が含まれるが、大半は19世紀以降の薩摩産の陶器片である。

S K 1・14（第6・10図）は円形の上坑である。

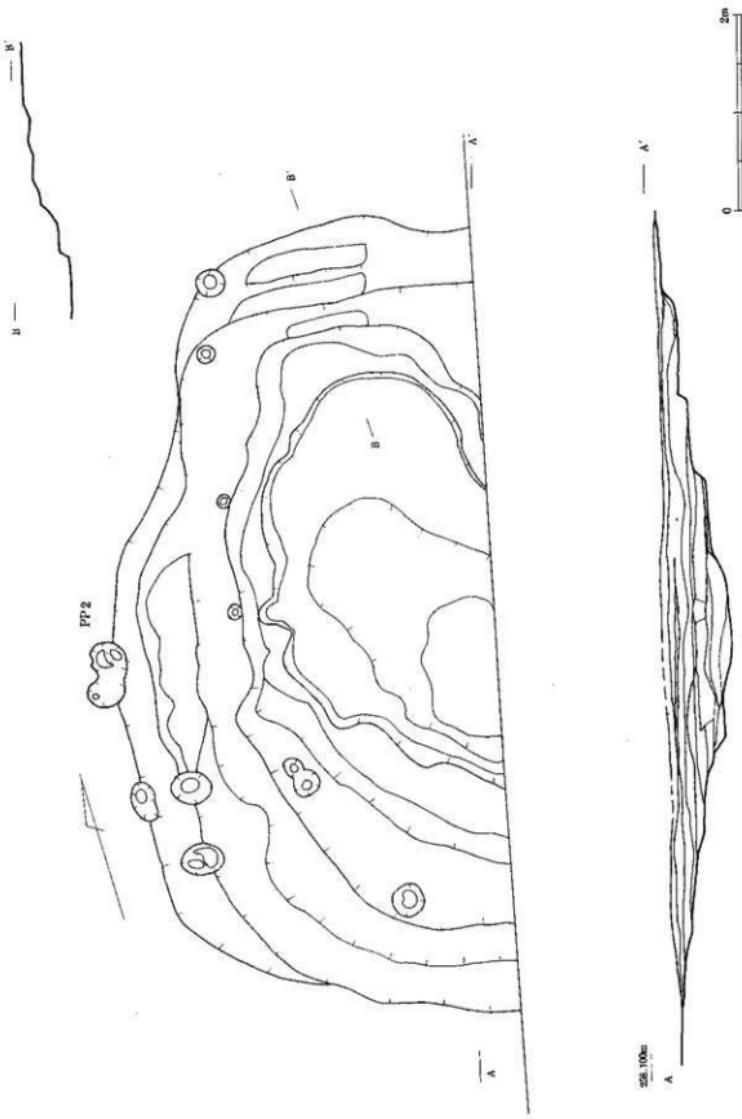
共に遺物の出土はなく、特筆すべき所見もなかった。

粘土採掘土坑（S K 10・17～19）

S K 10は、大型でハート型に近い不整円形を呈する土坑で、内側に突出して掘り残された部分は笄跡口のよう



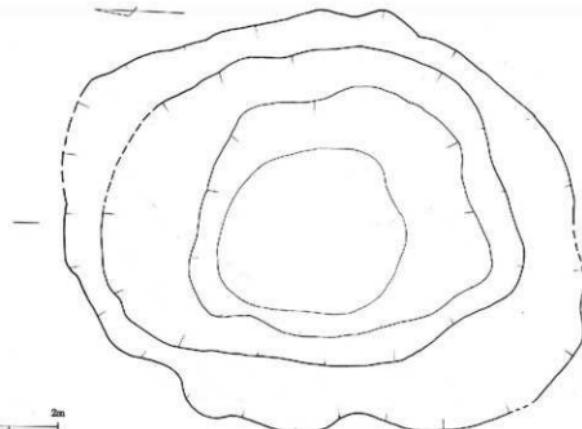
第6図 藏元遺跡 SK 1・2・3・4・5・7・15・16 実測図 (1/40)



第7図 蔵元遺跡 SK 6 実測図 (1/50)

SK 8

0 2m



257.900m



SK 11

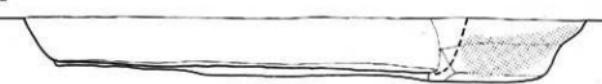
SK 12

SK 11

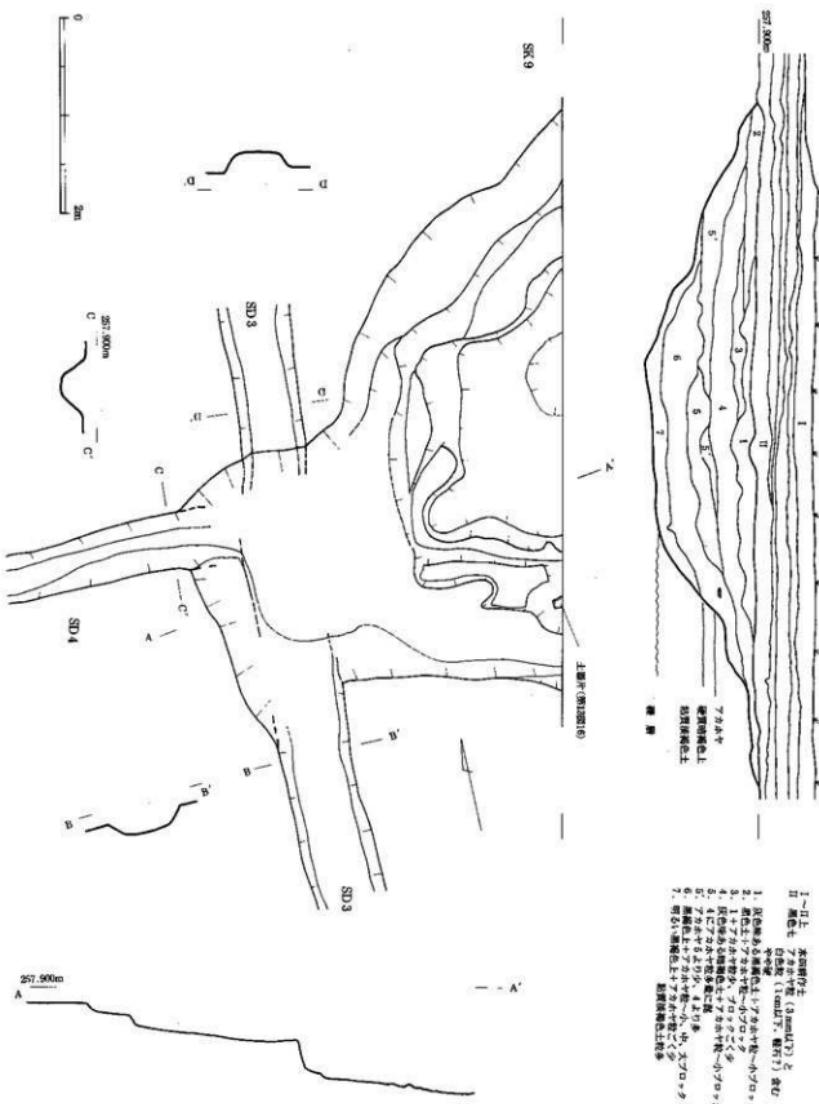
燒窯集中部分

256.300m

0 2m

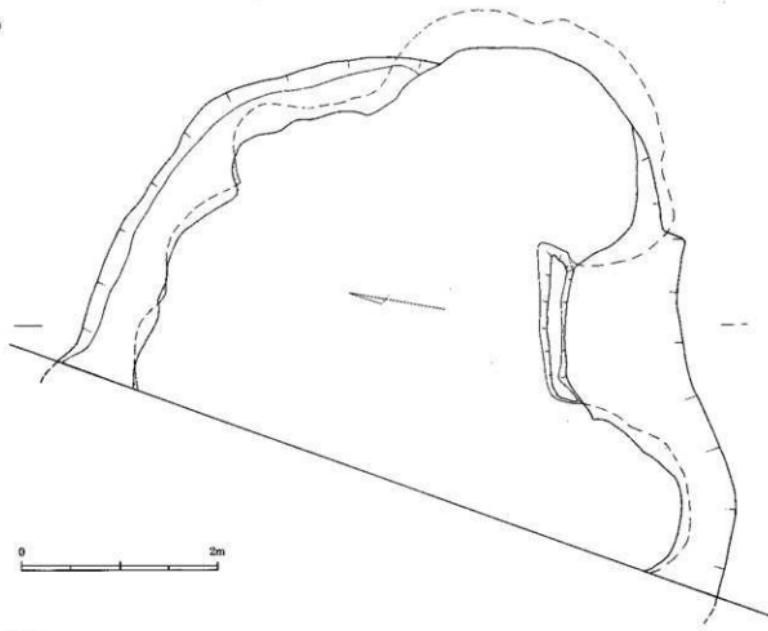


第8図 藏元遺跡 SK 8 (1/50)、SK11・12 (1/40) 実測図

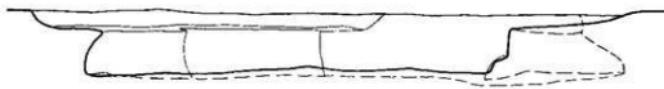


第9図 藏元遺跡 SK 9 実測図 (1/50)

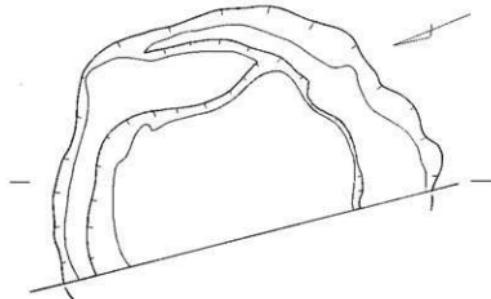
SK10



257.800m



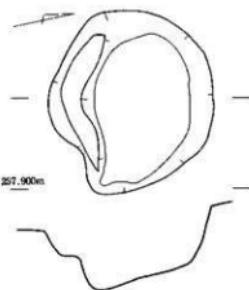
SK13



258.100m



SK14



257.900m



第10図 藏元遺跡 SK10 (1/50)、SK13・14 (1/40) 実測図

である。この昇降口を残してほぼ全周の壁面を袋状に抉り取っている。その状況は、VI層から下位に向けて徐々に奥へと掘り、白色粘質土層上半位で最も奥まで抉っている。

規模は、西部が調査区外にあり全容が分からぬが、検出部分の最大長が7.13mと大きい。

埋土は、十坑を築く際に掘り上げたII～VII層の黒色土・アカホヤ・褐色土・白色粘質土などのブロックが混在している。検出当初、埋土の様子からかなり新しい搅乱土坑かと思われたが、埋土断面では、数度にわたって整地しながら埋め戻した状況が看取された。これは、埋め戻した後も上面が生垣面に当たるため、念入りに硬くしるように埋め戻したものと考えられる。

遺物は、埋土中より青磁碗片（第14回31）と青磁片1点、陶器（常滑焼？）甕片1点が出上したのみである。青磁の川土から、中世またはそれ以降の所産であろう。

用途については、貯蔵用の施設ということも考えられるが、袋状に抉り取る必要性を考えると不自然な感がある。また、埋め戻した土も、他所から多量の土を持ち込んだというよりは、土坑構築後、短期間のうちにその役割を終え、掘り上げた土をそのまま使用した、と考えた方が妥当ではないだろうか。

以上のことから、S K10は「白色粘土の採掘」が目的の上坑として捉えている。ただし、白色粘土は床面にも残っており、全てを掘り尽くすほどの意志は感じられない。疊層に近い下層にはやや砂質で黄色味の強い部分も多いので、上層部の方が利用目的にとって「良質」だったのかもしれない。

S K17・18（第12回）はSD 7中央部、S K19はSD 7の南端部で、それぞれ溝状遺構の底面で確認された不整形の土坑である。埋土や形状などにSK10と同様の所見が見られたので粘土採掘上坑とした。また、3基とも長軸方向と溝の方向が合致するので、溝との関連がうかがえた。

遺構の掘り下げは、SD 7とSD 8との切り合いや遺構の形状、埋土の確認をするためのベルトやトレンチを設けて行なったが、完掘までに至らず3基の全容は明らかにできなかった。

S K18は、南側の壁面は確認できたが、反対の北側壁面（立ち上がり部）は調査区内では確認できず、北東の調査区境界面に至るまでの溝状遺構内全域について粘土

採掘の状況が看取された。長円に近い形の土坑を構築した後、粘土の堆積状況により北側に延長したものと考えられる。溝の西側面では、抉り採る範囲の奥行きがありすぎたためか、オーバーハング状態の上部が崩落した部分もある。反対側の東側面にも、アカホヤの位置が不自然で段差をもつ箇所があり、十分な確認作業ができなかつたが、西側同様崩落している可能性が高い。

S K18の断面には、SD 7以前に掘り込まれていたSD 15が下部に現れている。SD 15は、これより以南ではSD 7と重複しているようで、埋土断面では分層できなかった。粘土採掘土坑と溝状遺構との関係については、次のような経過が想定できる。

#### S K15 構築のため、掘り下げ

作業中に粘土の堆積箇所に当たる。

#### S K18 掘り下げ

下面および溝の両壁面から粘土を採掘。

十層の状況から南側にも粘土の存在を予想。

#### S K17 掘り下げ、粘土を採掘

#### S K18 一部崩落（この後にS K17掘り下げか？）

#### S K17・18 埋め戻し・整地

#### S D15 S K17以北の溝の構築再開、掘り下げ

#### S D15 利用→廃棄→埋没または埋め戻し？

#### S D 7 構築のため、掘り下げ

上記と同様の経過を経る。

#### S K19 粘土採掘・埋め戻し

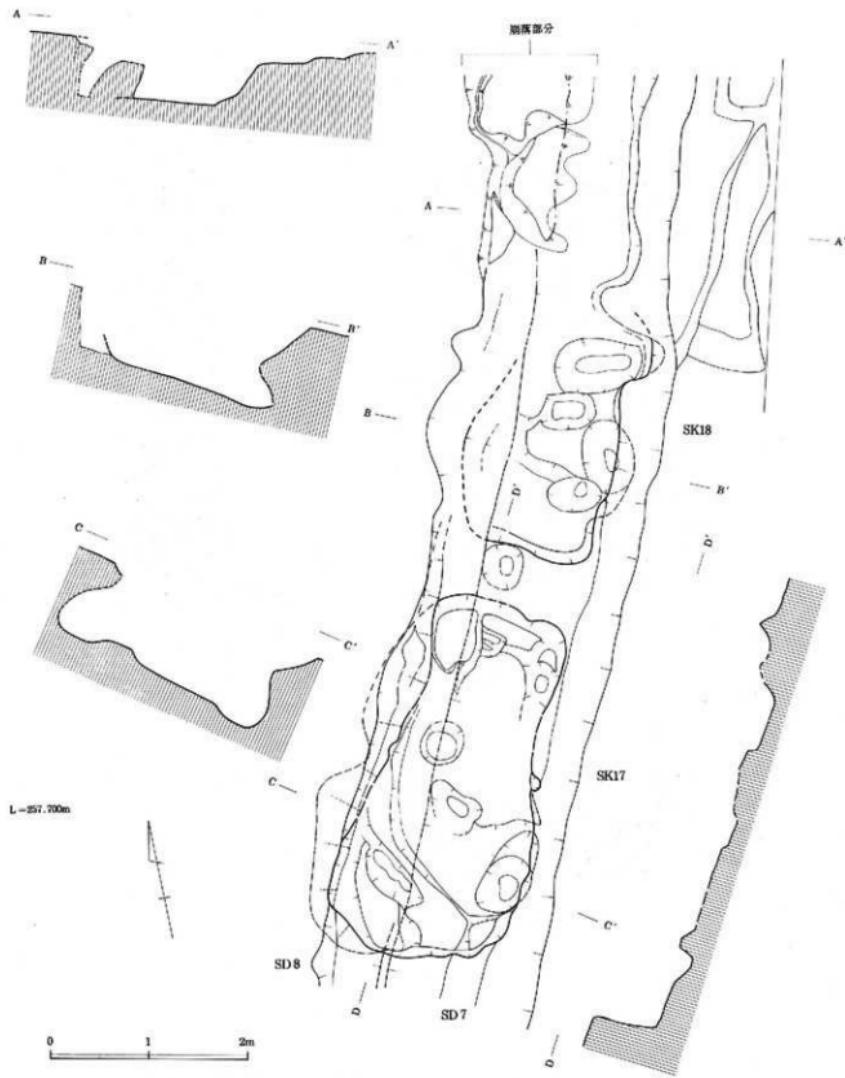
#### S D 7 再構築・利用・廃棄・埋没

#### 溝状遺構（SD 1～21）

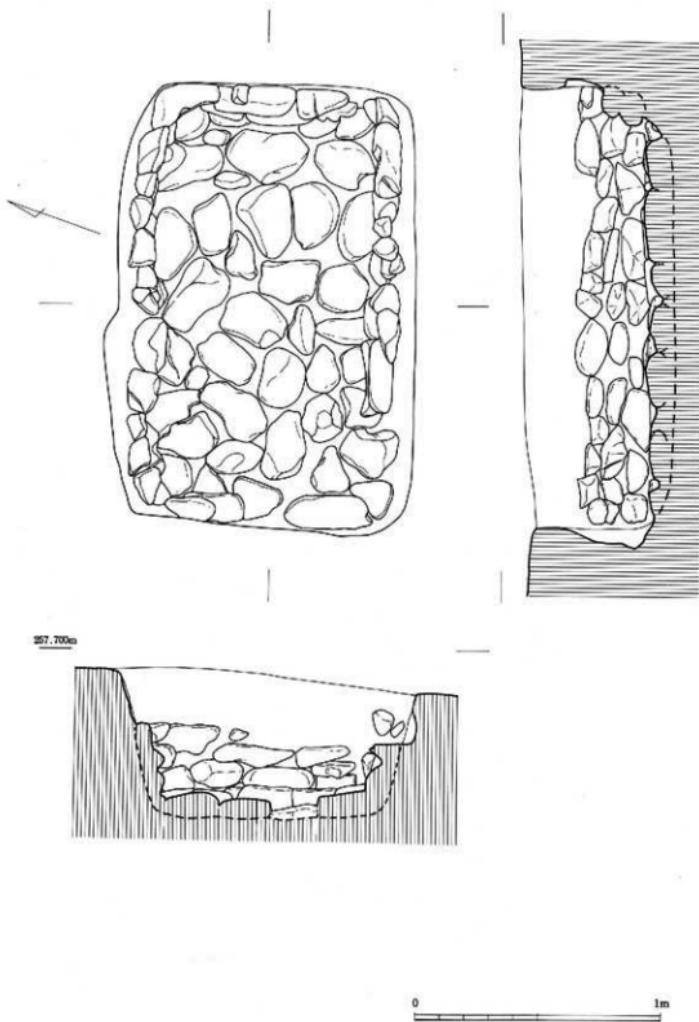
溝状遺構は、調査区が限定されているので、長さや形状、地形や集落との関係などの全容をつかむことはできなかった。

溝状遺構の断面形は、B区のSD 20・21が逆台形状である以外は、逆蒲鉾状・半円状・丸みのある開いたV字状などである。残存度の悪いものが多いため溝の形状については言及しないこととする。

埋土を見ると、SD 17・18ではIII層やアカホヤのブロックが入り込み、人為的な埋め戻しの状況を思わせたが、この2条以外は自然堆積による埋没と思われる。SD 7は、水の溜まっていた時間が長い溝だったのか、あるいは上部の水田の影響もあるのか、埋土最下層に鉄分の浸染が見られた。また、SD 21の埋土は細縫を少量含む暗



第11図 藏元遺跡 SD 7・8、SK17・18 実測図 (1/50)



第12図 蔵元遺跡 石組遺構実測図 (1/20)

茶褐色土で、A区の溝の埋土が黒色土を主体としているのに対して異なる。

A区の溝状遺構の中で、SD 3は最も長い区間を検出できた。SD 3は遺構が南端で途切れているが、この部分には、SD 6やビット状・土坑状の複雑な形の落ち込みがあり、遺構の切り合い状況がよくわからなかった。ただ、SD 3よりSD 6のほうが古いことはわかっている。ここで途切れるSD 3は、南部の溝状遺構SD 12・13・14のうちのどれかにつながると想像される。

A区南部では、北北東方向に延びる数条の溝状遺構が集中して検出された。その中で特に注目されるのはSD 7・15で、遺構下に粘土探掘土坑が検出された。詳細については先の粘土探掘土坑の項で報告している。

SD 8とSD 7・15の関係については、断面精査によるとSD 8はSD 7より古く、SD 15との先後関係は確認できなかった。もともとSD 8・15が同一遺構で壁面に段差を持つ形状だった可能性もある（図版13）。

SD 7はSK 17以南においては古いSD 15の遺構をそのまま利用しているのか全体的に重複しており、理上断面でも2条の区別はできなかった。また、SD 7南端部は、西端の調査区境界からSD 15との間にわたる落ち込みによって切られている。この落ち込みは遺物から近世のものとわかったが、遺構検出は未遂に終わった。

SD 7北部からSD 9・11西端にかけての複数の溝がL字型に屈曲、または交差していると思われる部分は、検出時に黒色土面が広い範囲にわたって見られたので、重機によるアカホヤ検出時に掘り下げすぎた感がある。そのために溝状遺構の残存度が概して低く、ベルトやトレーナーを設定しながら掘り下げ、東西の調査区境界界面での土層断面も精査したが、期間内に完掘することができず、溝の切り合いや連結、並列する溝の同別については確信を持てる形で検出することができなかった。

SD 9・11では、西部の掘り下げ範囲内で上坑状に落ち込む箇所が確認された。SD 6先端部にも同様の所見があり、ともに留意しておくべきであろう。

B区東側のSD 20とSD 21は、直線状で2条が平行に並んでいることから、「地割り」または道路に類する遺構である可能性も考えられる。さらに、これもまた平行な主軸をもつ掘立柱建物（SB 1）の存在も合わせると興味深い。

#### 石組遺構（第11図）

石組遺構の検出面での埋土の状況は、炭化物の混じる黒色土に白色粘土粒が混じっており、中央部には焼土も含まれていた。

その土を掘り下げるとき、礫が集積した状態で現れた。さらに、これらの礫を多量の炭化物粒～片と白色粘土・焼土粒の混じる土とともに取り除くと、礫を方形の箱型に積み上げた石組が検出された。礫は、底面は扁平な円礫を用いて敷き詰めており、壁面には、細長いか、または比較的小さな、やや角ばった円礫を用いている。礫間は、黒色土と白色粘土の混じった土で目盛りをしている。

石組の上部の壁面には、礫が本来はめ込まれていた痕跡の凹凸が検出されたので、当初は礫が少なくとも検出面までは組み上げられており、上半の礫が脱落して内部に集積していたことがわかった。

石組の規模は、長さ3.33m、幅1.94m、深さは検出面より1.03mである。

この石組遺構の用途は、各地で類例が増加しながらも未だ明確でない部分も多いが、ここでは埋土に炭化物と焼土が混じるとともに、底面・壁面の礫も遺構内面に露出する面が赤変している部分があるので、内部で火を用いたという事実だけは明らかである。

時期に関しては、遺物が皆無なので不明だが、類例を見ると中世のものが多いようである。

また、すぐ西側にSK 10があるが、この上坑が、右組遺構の調査の危険を懸念させるほど石組に近接する位置にまで掘り込んでいることから、両者の時期の関係については留意しておくべきであろう。

#### 性格不明の遺構（S Z 1）

S Z 1は、焼土が多く混じる白色粘土の広がりが認められた箇所である。住居の床面に相当する可能性もあり、周囲の柱穴を精査したが、住居跡に伴うと考えられる柱穴は見つかなかったため、断定するに至らなかった。

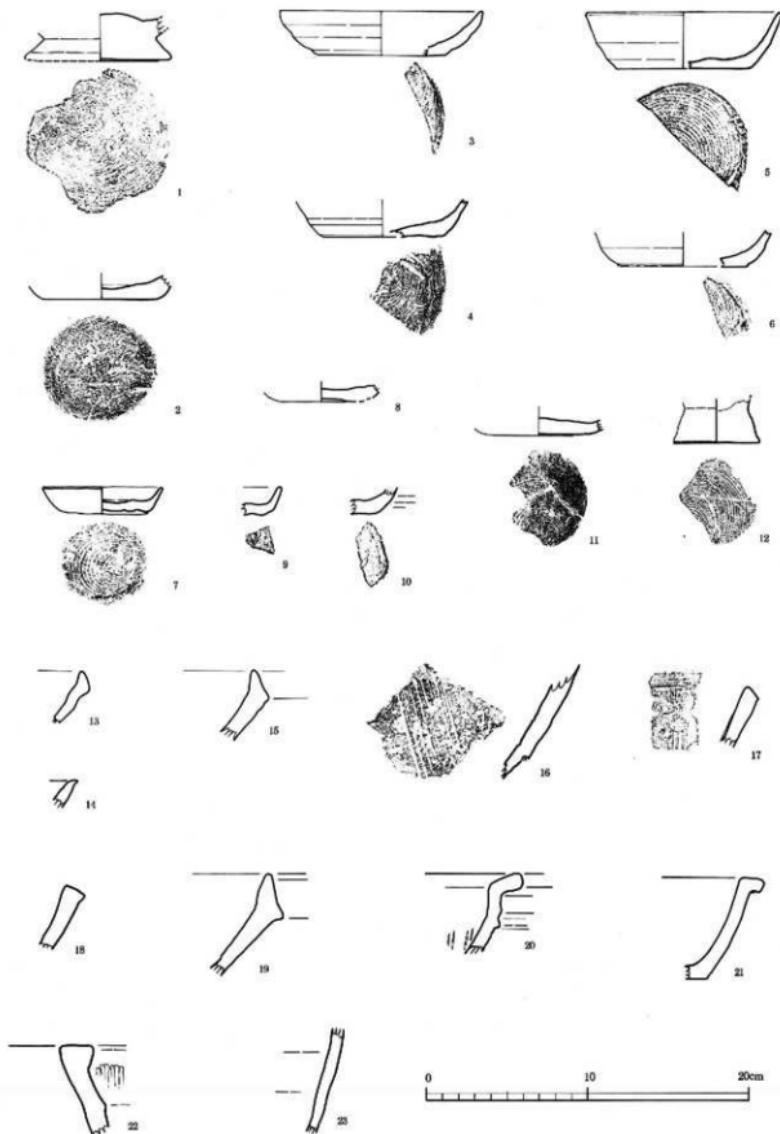
この範囲内のSD 3の上層にも焼土の混入が認められるが、新旧関係については確認を得られなかった。

#### 出土遺物について（第13・14図）

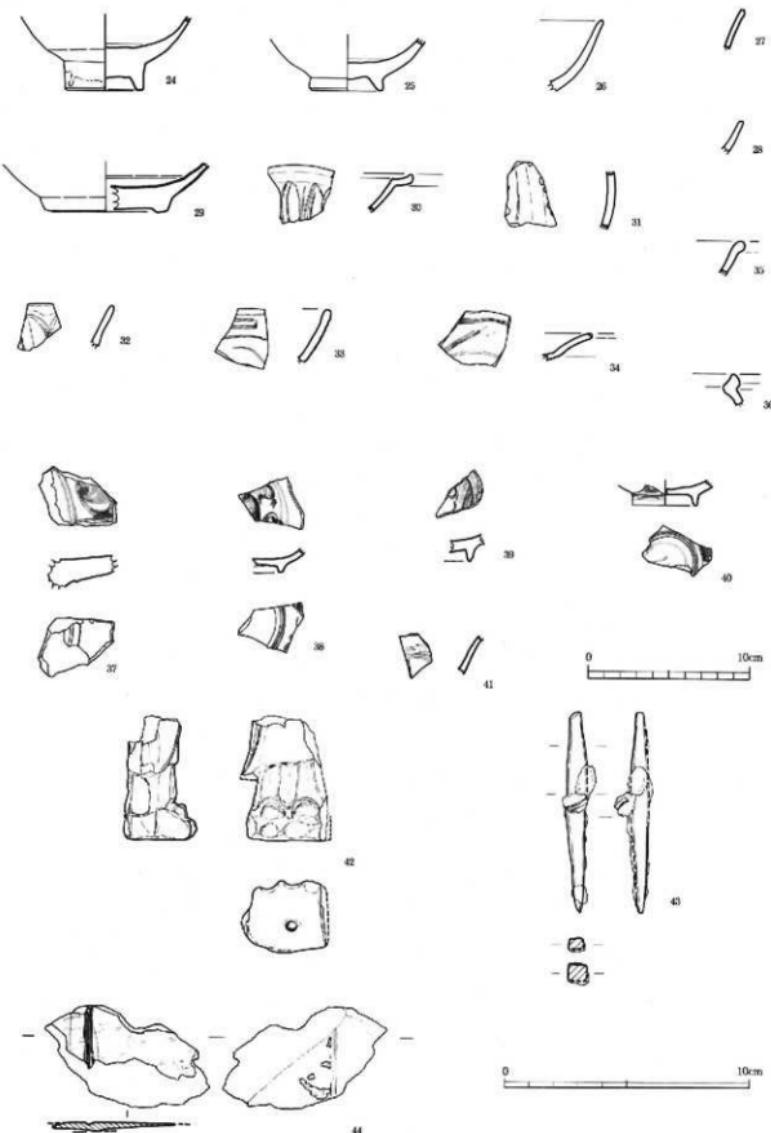
遺物は全体的に小破片が多く、個体の全体像がわかるものはわずかである。

各遺物の所見については観察表（第3・4表）を参照されたい。以下、特記事項のみ報告する。

1は、ごく厚い円盤状の粘土を压庄・整形したもののようにある。2も1と同様、粘土板を压展して底部とし



第13図 藏元遺跡 出土遺物実測図（1）(1/3)



第14図 蔵元遺跡 出土遺物実測図（2）(1/3, 1/2)

第3表 蔵元遺跡出土遺物観察表(1)

&lt; &gt; は現存値

遺物番号	出土位置	種別	器種 部位	法量(cm)		器面調整		色調 (外張/内面)	特記事項
				口径	底径	器高	外面		
1	SK 5	土師器	壺 底 部		9.1	N	N	淡黄橙	底部/粘土板正展 糸切り離し
2	PP 3	"	皿又は杯 底 部		6.8	N	N	淡黄橙	底部/粘土板正展 風化のため糸切り痕不明瞭
3	PP 5	"	皿 口縁~底部	(2.4)	(7.4)	N	N	にぶい黄橙	糸切り離し
4	SD 3	"	皿 縁~底部		(7.5)	N	N	淡黄	糸切り離し
5	PP 2	"	皿 口縁~底部	11.8	7.8	3.5	N	淡黄	底部/粘土板正展、板目痕あり 糸切り離し
6	SD 3	"	皿 縁~底部		(7.9)	N	N	淡黄橙	糸切り離し
7	PP 2	"	皿 口縁~底部		5.6	(1.7)	N	淡黄橙	回転糸切り離し
8	SD 4	"	皿 底 部		(5.4)	N	N	淡黄	ヘラ切り離し?高台付の可能性あり 風化著しい、1mm前後の赤褐色粒含む
9	PP 1	"	皿 口縁~底部			N	N	淡黄橙	糸切り離し
10	PP 4	"	皿 底 部			N	N	淡黄	糸切り離し
11	SK 6	"	皿 底 部			N	N	橙	回転糸切り離し
12	SD 3	"	底 部		5.3	N	—	橙	内面/欠損 糸切り離し
13	PP 6	"	鉢 口 縁			N	N	黄灰	2mm以上の灰色粒含む
14	SK 3	"	不 明 口 縁			N	N	にぶい黄/にぶい褐褐灰	
15	SD 3	陶 器	油 口 鉢 縁			ヨコN	ヨコN	にぶい赤褐	径1.5mm前後の白色赤褐色粒を含む
16	SK 9	陶 器	鉢 銚			N	No触知付のカキ目	にぶい橙	
17	SK 6	陶 器	鉢 銚			ヨコN	カキ目	褐灰・灰褐/褐灰	径2mm前後の黒色光沢粒・径1mm前後の赤褐色・乳白色粒を含む
18	SD 3	須恵器	酒 鉢 口 縁			ヨコN	ヨコN	灰・灰黄/黄灰	径1.5mm前後の淡黄色・赤褐色粒を含む
19	SK 9付近	陶 器	酒 鉢 口 縁		Y	N	カキ目	胎:赤灰 釉:浅黄	薄煎燒 径6mm前後の白色の粒・3mm以下の半透明光沢粒・白色粒を含む
20	SD 18	陶 器	酒 鉢 口 縁		Y	N	カキ目	胎:褐灰・灰褐色 釉:暗褐・光沢	胎:赤灰・にじ 釉:白・乳白色 外面/2条の突起あり 須恵焼 径2.5mm以下の乳白色粒を含む
21	SD 7~15間 落ち込み内	陶 器	鉢 口縁~底部		Y	口唇部露胎	Y	胎:赤褐 釉:オリーブ黒	薄煎燒 径2mm前後の乳白色・赤褐色粒を含む
22	A区 SK11 付 近	土師器	處 ? 口 縁		ヨコN	ヨコN	明黄褐/灰黄褐	外面/突起あり 口唇~尖端部に約2.5mm幅ヘラ状工具によるタテ方向の調整	
23	SA 1	陶 器	銚 銚 部		?	Y	Y	胎:明黄褐/にじ 釉:電赤褐・オリーブ灰	SK 6 埋土中の範片と接合
24	SD 7~15間 落ち込み内	陶 器	高台付銚 銚 部	2.6	Y	高台下半露胎	Y	胎:灰白 釉:電赤褐・オリーブ黒	薄煎燒 内面/蛇の目釉剥落
25	SD 7~15間 検出面	陶 器	碗 銚 部	4.6	Y	高台内露胎	Y	胎:白・電赤褐・オリーブ 釉:白・電赤褐・オリーブ黒	*薄煎燒 18C~ 胎:白・電赤褐・オリーブ黒
26	SD 18	陶 器	碗 口 縁		Y		Y	胎:にぶい黄 釉:赤褐・黄橙	*薄煎燒 18C~
27	SD 10	磁 器	碗 口 縁		Y(貫入)	Y	胎:灰 釉:灰白		*九州産 18C~

第4表 藏元遺跡出土遺物觀察表(2)

ていることが底面の細かなひびからわかる。

3~11は土師器皿・皿であるが、破片が多く、全体の器形がわかるものは少ない。ほとんどが糸切り底である。うち、5・7はP P 2出土で、5の内湾気味の体部から時期は12世紀後半と思われる。

8は底部に輪高台の痕跡らしいものがあり、器種と時期について一考を要する。

42は僧形と推測される上製作人形の脚部である。底面には径4mmの、円形の穴がある。穴の深さは2.4cmで、先細りの串刺状の形をしているようである。この穴には、合わせ型から抜き取る時や器皿整形の時に棒を差し込んでいたと思われる。同形の人形は、清武町の山内右塔群XII区（16世紀中葉～17世紀中葉）でも出土している。

43はS A 1川土の器種不明の鉄器である。断面形は長方形で中央は正方形に近い。下部先端はタガネ状になっている。上部先端は、欠損しているか否か判別が難しい。

44は、薄い板状の灰色頁岩の表裏に研磨を加えているもので、磨製石器またはその未製品、あるいは砥石や石板のうちのどれかの破片と思われる。表面には、幅2.5mmで深さ1mmの溝状の擦痕があり、裏面には表面に対応する位置に擦痕と、わずかに研磨面が認められる。この溝は、切断が目的の「擦切痕」と思われる。

### 3. 法光寺遺跡 I

#### 1. 調査の経過

法光寺遺跡の4年度の調査は、農道用地（A区）と包含層の削平が懸念された農地部分（B・C区）について行なった。

C区は、初め長方形の水田部分を調査したが、遺構が比較的密な状態で検出されたので、北東部と西北部の区画も調査区に加えた。C区で重機によりII層以上の土の除去を行なった際には、SK 8などで遺構内の土器が重機によって破碎・除去された例もあったので、後に加えた二区画ではII層黒色土の除去に細心の注意をはらった。

C区北東部では、黒色土上面まで重機で除去して精査の後、以下III～IV層面まで手掘りで掘り下げて遺構・遺物の検出を試みた。黒色土面の精査では、遺構と想定される部分がいくつか観察されたが、確認を得られなかつた。そのため、半蔵するような形で半分をIII層黄褐色土

まで掘り下げて遺構の有無や輪郭を確認するとともに、黒色土の断面を観察することにした。

この結果、遺構と断定できたのは黄褐色土面で遺構が現れたものだけであり、結局は、黒色土を遺構検出面にするかがいかに難しいかを再認識することになった。

A区では、最北部の畑地部分を作付け終了後に追加調査した。この部分では、III層まで掘り下げる原地形に浅い谷状の凹みがあることがわかり、また、遺構は全く検出されなかつた。

C区南西部のS D 2の西側は、以前鉄道の踏切に通じる道路があった箇所で、黒灰色土にシラス様の白色砂質土が多量に混じる道路状の客土・擾乱部が南北方向に延びている。この部分は表土除去の際に誤ってII層として除去しなかつた所で、非常に硬く人力で掘り下げるのに困難であった。そのため、調査終盤時に西側隣接区画の工事を開始した業者に依頼して南西部の客土を重機で除去するまで、SD 2の南西方向への屈曲の是非とSK 18・19の存在の確認はできなかつた。SK 18・19の掘り下げは、時間的制約上、部分的にのみ行なわざるを得なかつた。

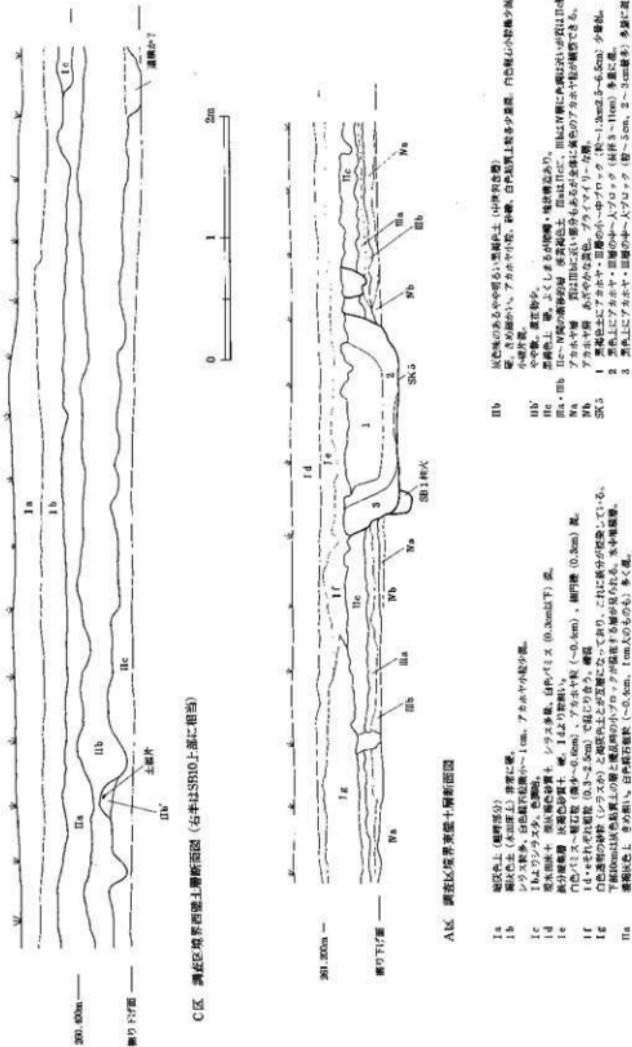
調査終了期近くに、試験的にA区～C区間の南端部を結ぶ区間（D区）も重機でアカホヤ面を検出してみた。その結果、近代の土坑のみで見るべき遺構は検出されなかつたが、南側断面のII層最上層で布目瓦片1点が出土した。

#### 2. 包含層の状況

法光寺遺跡の包含層については、基本層序の項で報告したとおりである（第15図）。

法光寺遺跡では、全体的に黒色土が厚く残りアカホヤ面は地表下0.7～1.5mと低いレベルにある。そのうえ原地形が調査区周辺部に向かって落ち込んでいることから当時の生活面からアカホヤ面はかなり下方に離れていると考えられる。そのため、II a・II b層を手掘りで掘り下げるには時間がかかりすぎ、アカホヤ面を遺構検出面として一気に重機で掘り下げる遺物包含層はもとより遺構も失ってしまう可能性が高い。そこで調査区の大部分ではII c層～III層上面を遺構検出面としている。それでも遺構の残存度は低く、SK 9のようにかろうじて床面が残るものも少なくない。

以上のように、法光寺遺跡では遺物包含層本体についてのきめ細かな調査は望めず、遺構も下位部分の検出となつたので、遺物量は調査面積に比してかなり少ない。



第15圖 法光寺遺跡 主層斷面空測圖 (1/40)

### 3. 検出した遺構と遺物（第16～18図）

法光寺遺跡で検出された遺構は以下のとおりである。

堅穴状遺構	1基	(S A 1)
掘立柱建物	15棟	(S B 1～15)
柱列	2列	
土坑	20基	(S K 1～20)
ピット群	2群	(ピット群1・2)
ピット	約450個	(建物・ピット群除く)
粘土採掘土坑	2基	(S K 18・19)
溝状遺構	2条	(S D 1・2)

以上その他、円形や不整形の浅い土坑状の落ち込みが散見されるが、特筆すべき所見はない、浅すぎて遺構本来の形状が不明、ピットとの区別がしにくい、イモ穴等の新しい遺構が混じっている可能性があるなどの理由により、特に取り上げていない。

また、「端部にピットをもつ土坑状の遺構」は、現在でも長い柱状のものを立てるときに同様の穴を掘る例があるように、ピットに遺構本来の目的があると見て土坑状の「ピット」としている。

ピットは多数検出されており、中には掘立柱建物以外の施設もあると想像されるが、現段階ではピットの配置についての綿密な分析を経ておらず確証を得られないで言及しないこととする。

調査区内の遺構分布状況を見ると、A区北部および南端部、C区南端部～南西部、B区中央～西部は分布が疎であるが、これらは原地形が低くなっている区域で遺構検査面のレベルが低く、遺構がこの面まで達していないため検出されなかっただけである。

その中でも、A区北部にほとんど遺構がない原因としては、検出レベルや地形の他に、S D 1が集落の内外を区切る境界の役目を果たし、以北が生活空間外だったということも考えられる。

法光寺遺跡で検出された遺構と遺物は古代を中心としており、藏元遺跡でも検出された堅穴状遺構と粘土採掘土坑は中世の所産のようである。掘立柱建物は多くにC区北半部に集中しており、ここが古代の集落の中心に相当することがうかがえる。

法光寺遺跡で出土した遺物の量は、コンテナ約5箱分である。内容はほとんどが古代の上部器物で、少量の陶磁器片と鉄器数点が加わる。

以下、各遺構と遺物について述べる。

### 堅穴状遺構（S A 1、第18図）

S A 1は、A区中央東側で検出された堅穴状遺構である。その形状は辺2.15mの方形で、四周に深い壁帯溝がめぐる。西辺中央南寄りの位置には段差が設けられ、その内側には段差に対応する形のピットが4個あり出入り口を思わせる。段差は対面する東辺にもあるが、崩落によるものか人為的なものか判断しかねる。この遺構の構造に関わる主なピットは、四隅の4個と西辺中央北寄りの1個である。後者に對面するピットが東辺にあるが浅い。埋土はアカホヤのブロックを全体に多く含み埋め戻しの状況を呈する。遺構の規模・埋土とともに藏元遺跡のものとほぼ一致する。遺物は埋土から須恵質の灰色の陶器片1点が出土したが、粉失の難に遭い、掲載できなかった。

### 掘立柱建物（第5表、第19～23図）

掘立柱建物はA～Cの各区で検出されており、ほぼ全域にわたって集落が形成されたことがわかる。

規模は梁行2間・桁行3間のものが圧倒的に多く、同じく1間・3間と2間・2間のものが2棟ずつある。

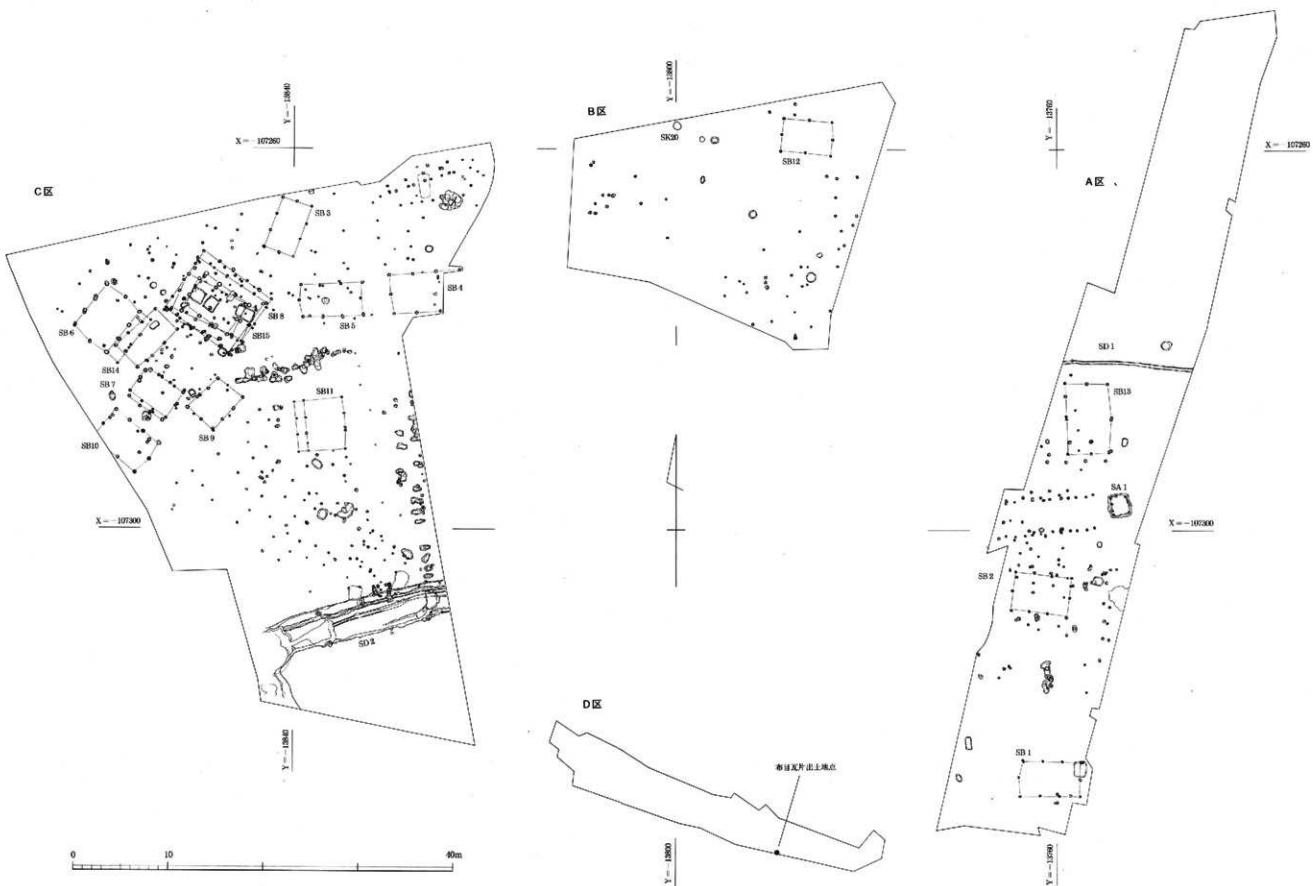
形態を見ると、梁行2間の建物の中に、梁間中央の柱穴の両方または片方が梁直線上に並ばず外側または内側に突出するものがあることが特徴的である（S B 1・5・6・10）。また、庇のつくものは5棟あるが、中でもS B 8は四面ともピット列があり四面庇かと推測される大型の建物である。S B 15は両梁に庇が付く形態である。南側の桁に平行なピット列もあるが、庇なのか塀のようなものか不明である。

S B 13では、南側に梁行に平行して並ぶピット4個があるが、これは建物に付随する目隠し塀のような施設である可能性がある。

建物の配置を見ると、S B 7・10とS B 4・5の各2棟がほぼ同一方向の主軸をとる。それぞれが同時期の建物である可能性が高い。

S B 8とS B 15は重なって検出されたが、その範囲内にある方形の土坑S K 10・12と両建物の柱穴との切り合ひ関係から、S B 15が最も古く、土坑はそれと同時期かその後、S B 8が最も新しいといふことがわかる。二棟の出土遺物からは顕著な時期差が確認できないので、建て直しをした可能性が高い。

掘立柱建物の柱穴を見ると、掘り方と柱痕部で埋土が異なることで木柱の大きさがわかるものもある。



第16図 法光寺遺跡 調査区配置図 (1/400)



第17図 法光寺遺跡 C区 遺構分布図 (1/200)



第18図 法光寺遺跡 A区 遺構分布図 (1/200)

また、柱穴柱痕内に白色～淡褐色粘質土が充填されている例（S B 6）または同土が柱穴内に少量入る例（S B 10）があるのは興味深い。建物外のピットにもこのような所見のあるものが散見された。

掘立柱建物の柱穴から出土した遺物は、おおよそ10世紀前半を中心とする年代の土師器壺・壺・甕・輪入陶磁器片などである。S B 8では墨書き器（102）が出土しており注目される。鉄製遺物もS B 6から馬具（124）が、S B 15から刀子が出土している。

以上、掘立柱建物について報告したが、現段階では、検出されたピットすべてについて埋土の所見、出土遺物の時期や接合関係について十分検証しておらず、未だ分析の余地はある。

#### 土坑（第6表、第25・26図）

検出された土坑20基のうち、10基は方形の土坑である。そのうちS K 8～13はS B 8・14・15内に建物主軸に添うように配置されており、掘立柱建物との関連を考えられる。

S K 13では焼土とともに竹や木シロ状のものが炭化した状態で検出され、火を使う土坑の用途が注目される。

S K 16ではピット状の落ち込み内から完形の高台付壇2点（78・104）が出土している。このピットの底面には、灰層が厚さ約5cm堆積していた。S K 16の北端のピットは土坑を切る別な遺構である。

#### ピット群・土坑状ピット（第26図）

C区中央北寄りの位置に東西に並ぶピット群1と、同C区東辺部に南北方向に並ぶピット群2がある。

両群は直交する方向に配置されており、同時期の何らかの施設である可能性もある。埋土が黒褐色土にアカホヤのブロックを含むものである点や、ピットの並ぶ方向と直交する方向を長軸とする小判状～不整長方形の土坑状の掘り込みをもつとも共通している。この掘り込みは、ピット群2ではどれも西側に配されている。

同様のピット（土坑状ピット）は、ピット群以外でも数基検出されている。P P 1は、検出時に切り合いかはっきりしなかったが、数基の土坑状ピットが重複していると思われる。

これらのピットは、先述したように比較的長い（高い）柱を立てる目的のものだとすると、「柱列」に近い施設であったことも想像できる。

#### 柱列

A区では堅穴状遺構の西側に2列の平行に並ぶ柱列がある。

確認のため、この部分のみ調査区を西に約1m延長してみたが、柱列はさらに続いており、独立した建物に類する遺構というよりは構造的に近い形態の施設が長い区間にわたって構築されているという感がある。

柱列の位置を見ると、西側延長方向にS D 2があるのが興味深いが、調査区が限定されているので両者の関係については明らかにできなかった。また、柱列が終結する東端の東側、二柱列間延長上にS A 1があることも両者の時期と遺構の性格を考える上で注目すべきであろう。

#### 溝状遺構（第27図）

溝状遺構2条のうち、S D 1はA区で検出された幅30cm前後の細いもので、西端部調査区境界の遺構残存部の断面観察により、深さは少なくとも20cmはあったようである。断面形状は方形に近い逆台形である。埋土はきめの細かい黒褐色土で検出面に近いレベルではⅢ～Ⅳ層の小ブロックも少量含む。

一方のS D 2は、幅約4mと大型の東西に直線的に延びる形の遺構で、検出当時はその整然とした形状と埋土にアカホヤ粒～ブロックが多量に混入している状況から新しい時代の道路か、という感があったが、掘り下げる平安時代～13世紀代の遺物のみが出土した。

S D 2は西に向かって緩やかに低く傾斜しており、底面には平坦面が多く、平安時代の道路跡とも考えられたが、硬化面が確認されないことから溝状遺構とした。内部には細い溝3条が掘り込まれているが、あるいは、一体の遺構ではなく、藤元遺跡で平行に重なる溝状遺構が多く検出されたように、数条の溝状遺構が重複した結果にできた遺構である可能性もある。しかし、これについては埋土断面観察を経ても明らかにし得えなかった。また、検出段階ではS D 2の西端部は南に屈曲していると見えたが、実際には中世の粘土採掘上坑2基に切られており、以西の形状は不明である。

S D 2内部の形状を見ると、土坑状の落ち込みを先端部にもつ溝や不整形な土坑、西部では方形の比較的大型の落ち込みがあり、別な遺構が切り合っていたことも考えられるが、検出面では確認できなかった。なお、北辺で遺構を切る落ち込みは、現代の搅乱によるものである。

出土遺物には、須恵器壺片（61）、高台付き壇底部（98・100・111）、青磁碗片（65）などがある。

第5表 法光寺遺跡 挖立柱建物一覧

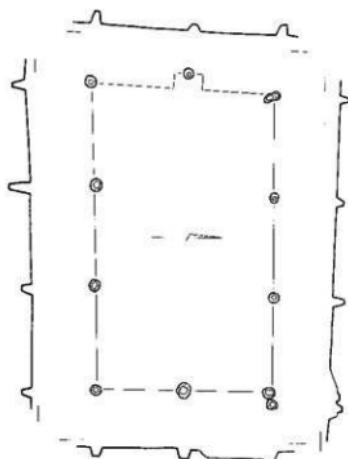
※丸囲み数字は挿図遺物番号、数値は破片数

遺構名	地区	規模 (間)	采行 <sup>(m)</sup> (柱間寸法)	桁行 <sup>(m)</sup> (柱間寸法)	主軸方位 (Nは座標北)	埋七	出土遺物※			
							土器 壺(壺)	土器 壺(壺)	他	
S B 1	A 区 南端部	2×3	東3.50(1.75) 西3.65 (1.90, 1.80)	6.15 (3.05)	N-89°-W	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。 北側桁行中央2柱穴柱底埋土は灰黑色土。				
S B 2	A 区 中央部	2×3	4.10 (2.05)	5.85 (1.95)	N-83°-W	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。 南側桁行柱穴は同上に灰色砂質土混。				
S B 3	C 区 北端部	2×3	3.30 (1.60)	5.60 (1.85)	N-20°-E	四隅と西側桁行2柱穴には直徑約15cmの柱底。 その埋土は白色土にアカホヤ粒少混。阿闍方理上にはアカホヤ少ブロッタ多混。 上記以外は黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。	内黒 脊部1			
S B 4	C 区 北東部	2×3?	4.10 (2.05)	7.35? (2.45)	N-85°-E	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。	脊部 2	脊部 2	器種不明土壺 4	
S B 5	C 区 北部	2×3	3.40 (2.20) 西3.35 (2.19)	6.40 (2.20) 西3.35 (2.19)	N-87°-E	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック混。により量の違い有。	口縁部 1 脇部 2	脇部 3		
S B 6	C 区 北西部	2×3 東側桁行に底 横底3.10 横底3.30	4.40 (3.10)	5.55 (1.85)	N-38°-E	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。 南側桁行4柱穴には直徑20～25cmの柱底。 その埋土には白色～淡褐色粘質土の小粒～小ブロックが多くまたは密に混。(本文報告も参照)	内黒高台付塊底箱⑤ 塊山縁～脇部⑥ 塊底箱⑦ 口縁～脇部⑧ 内黒脇部 1 脇部 3	頭～脇部⑨ 布底上縁⑩ 鉄器(轡)⑪		
S B 7	C 区 西部	2×3 南側桁行に底 横底3.10 横底3.00	3.30 (1.80)	4.70 (1.85) 中央1.45	N-54°-W	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。	内黒脇部 2 脇部 3 夕タ高台 9	脇部 7		
S B 8	C 区 北部	2×3 四隅全てに 底か。	4.00 (1.85) 北(1.85) 南(2.00) 中央1.55	5.55 (2.00)	N-55°-W	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック比較的多混。 大ブロック(～5cm大)が入るもの有。	黒土土器(高台付塊)⑫ 高台付塊底箱⑬ 口縁～脇部⑭ 脇部 1 内黒口縁部 2 内黒脇部 1 口縁部 5 高台付塊底箱⑮ 脇部 11	口縁部 5 脇部 1 脇部 13	陶器口縁部 1 (湖灰釉)	
S B 9	C 区 西部	2×3	東3.30 (1.25, 2.05) 西3.45 (1.35, 2.05) 中3.15 (1.35, 1.35) 西3.60(1.80)	7.45 (1.35) 西3.60 (1.35, 1.35)	N-44°-E	黒色土にアカホヤ粒少混。	底 脇部 場口縁～脇部⑯	口縁部 5 脇部 1 脇部 13		
S B 10	C 区 西部	2×3	3.90(東) 北1.95 南2.35	5.80(北) 北1.95 南2.35	N-51°-W	黒色土にアカホヤ粒甚少混。 北側桁行中央南の柱穴には白色粘質土少混。	高台付塊底箱⑰ 底部設 底？足置付 脇部 1 内黒口縁部 1 内黒脇部 4 口縁部 4 脇部 12	口縁部 2 脇部 1 脇部 16	白磁碗⑱ (越州窓)	
S B 11	C 区 中央	1×3 西側桁行に底	3.90 (1.30) 北1.75 西3.00(1.75)	5.50 (2.65, 2.40) 西3.60(2.65)	N-3°-W	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。				
S B 12	B 区	2×2	北5.05 (2.65, 2.40) 西5.30(2.65)	N-87°-W		黒色土にアカホヤ粒少混。 西側桁行北側2柱穴は埋土アカホヤブロック多混。柱脚埋土上黒色土に灰褐色土粒混。				
S B 13	A 区 中央部	2×2 南端に底か 南4.10 北2.15, 1.95	北4.20(2.10) 西7.30(3.80) 西7.40(3.70)	N-3°-W		黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。	坏？皿？底部⑲ (糸切離し)			
S B 14	C 区 西北部	1×3	5.60(1.85) 北5.70(1.90)	N-48°-E		黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混。	堺 底部⑳ 高台付塊(完形)⑳ 脇部 10	底付近急 器種不明土壺 1	脇部 7	
S B 15	C 区 北部	2×3 東側に底 南側桁行に底 または底か。	東3.65(1.80) 西4.00(2.00) 中2.20	5.90 (1.85) 北5.70(1.90)	N-66°-W	黒色土にアカホヤ粒～ブロック混。ブロック大きさ・量は柱穴により違う。	坏？口縁～脇部⑳ 脇部 4	脇器差異器蓋 1 口縁部 1 脇部 1 脇部 4 素器(刀子)舟 1		

第6表 法光寺遺跡土坑一覽

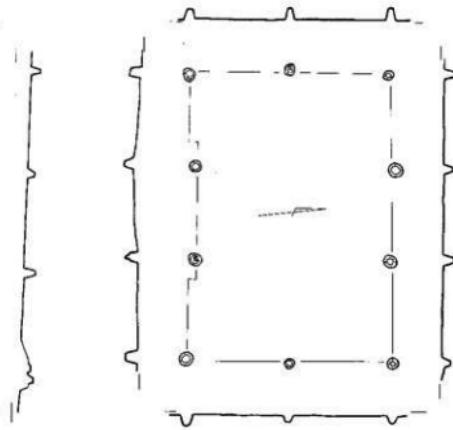
遺構名	形 状	検出面での規模(m)			埋 七	出 上 遺 物			特 記 事 項
		最大長	最大幅	最大深		土器器	須恵器	他	
S K 1	円形	1.17	0.96	0.10	黒色上(Ⅱ層)に淡黄褐色(田畠)・アカホヤの粒状～ブロック混				
S K 2	隅丸長方形 (やや不整)	0.85	0.54	0.09	黒色土に粗面小ブロック多・アカホヤ粒少混				
S K 3	不整円形	1.40	0.93	0.09 (ビット) 0.15	黒色土に粗面・アカホヤの粒～小ブロック少混				西側ビットは切り合いか。 検出時に確認できず。
S K 4	長方形	1.27	0.59	0.11	黒色土に粗面・アカホヤの粒～小ブロック少混(径～1.5cm)				
S K 5	方形	1.58	1.32	0.20	黒色土にアカホヤ少～大ブロック混(径～15cm)				S H 1より後に掘り込まれた土坑。 第15回上層断面図参照。
S K 6	不整形	2.40	1.94	0.64	黒色土にアカホヤ粒少混	壺口縁④ 壺底部④ 环底部 1 片 1			複数に掘り込まれた土坑。 東端部はS K 7に切られる。 西端部は深さ0.49mのビットに切られれている。
S K 7	椭円形	1.08	0.81	0.15	黒色土にアカホヤ粒～ブロック多混				断面半円形
S K 8	方形	0.90	0.78	0.11	黒色土にアカホヤ小ブロック混	壺口～肩④ 肩口～肩④ 肩口 1 环口縁 1			壺が伏せられた状態で出土。その底部に検出時に欠損したようである。 土坑底面は自然捲曲による凹凸が激しい。
S K 9	隅丸長方形 (やや不整)	1.06	0.57	0.07	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混	壺口～肩④ 肩口～肩④ 肩口 1 环口縁 1			検出面から極く浅い遺構。 北壁をぐく。 東南隅に焼土有。
S K 10	方形	1.53	1.43	0.22	黒色土にアカホヤ小ブロック混 中央は少混	环口縁 1 环底部 1 肩上片 1			
S K 11	方形	1.50	1.29	0.15	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック少混	壺口～肩④ 肩口～肩④ 肩口 1 环口縁 1			
S K 12	長方形	1.10	0.62	0.27	黒色土にアカホヤ粒～小ブロック混	肩口～肩④ 肩口～肩④ 肩口 1 环口縁 1 肩上片 10			北東部落ち込み内埋土下層には灰が多く残していた。 一部ビットに切られている。
S K 13	長方形	2.02	1.28	0.18	黒色土に炭化物や土生 粘多く混。 アカホヤ粒少混	肩口縁 3 肩口縁 6 肩口縁 1 不明片 1 不明片 4			東半部焼土とともに炭化物集中して出土。板状の木材、竹、繩張又はムシロなどが炭化。磚も入る。
S K 14	隅丸長方形	1.18	0.72	0.13	黒色上にアカホヤ粒全 体的に多く混	环口縁 11 肩上片 3 壺口縁 1 肩上片 3 壺口縁 1			
S K 15	隅丸方形	1.17	0.96	0.23	黒色土にアカホヤ 粒～小ブロック少混。 とくに雨舟	环口縁 1 肩口片 2 不明片 2			
S K 16	不整形	1.96	1.20	0.43	黒色土にアカホヤ 粒～小ブロックやや多 混	肩口縁 1 肩口縁 1 肩口縁 1 肩口縁 1 肩上片 1			北端ビットは後に掘られたもの。 中央ビット状落ち込み内埋土は灰が多く残している。底面上約10cmに灰層。 土坑内には磚片も入る。
S K 17	不整形	1.41	0.84	0.23	黒色土、目層、アカホ ヤの粒～小ブロックが混 在。埋め戻しか。	底 直 1 环底部 1 肩上片 1			北西隅は未掘。
S K 18	不整円形?	(4.35)	—	(0.97)	黒色土に田畠・アカ ホヤの粒～小ブロック少 混	直 底 1 环底部 1 肩上片 1 环底部 1 肩上片 1			南東部底面はオーバーハング状態。 南北・中央・北西部木樋のため全容 不明。
S K 19	不整円形?	(3.55)	—	(1.02)	同上。 S K 18と同様埋め戻し の状況。	肩 口 片 2 肩 口 片 3 壺 瓶 1 肩 口 片 1 壺 瓶 1			東半部底面の一部オーバーハング状態。 北東部および中央のみ調査。 他は未調査のため全容不明。
S K 20	円形	0.86	0.76	0.10	黒色土に目層・アカホ ヤの粒～小ブロック混。 (径～2cm)	环 底 1			

SB 1



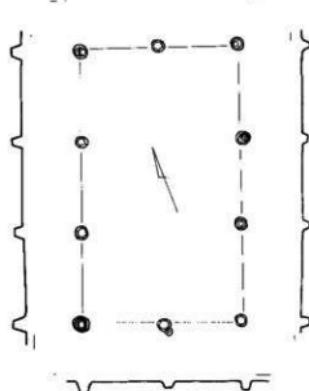
L - 259.00m

SB 2



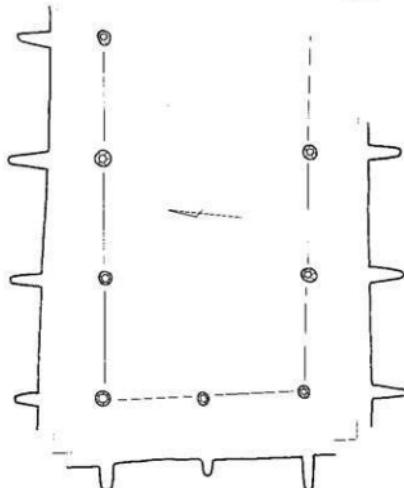
L - 261.00m

SB 3



L - 260.60m

SB 4

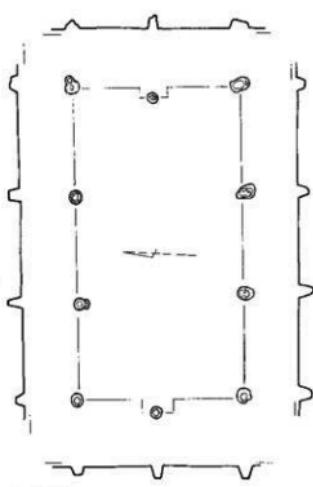


L - 260.60m



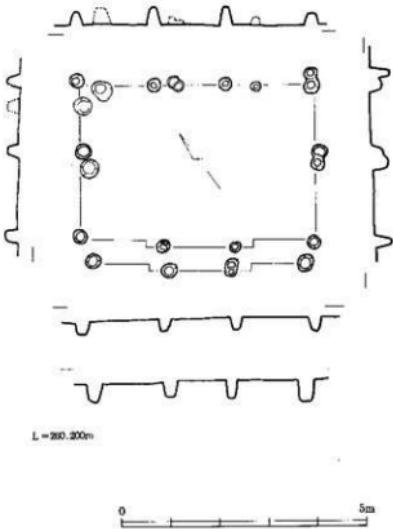
第19図 法光寺遺跡 SB 1・2・3・4 実測図 (1/100)

SB 5



L - 200-400m

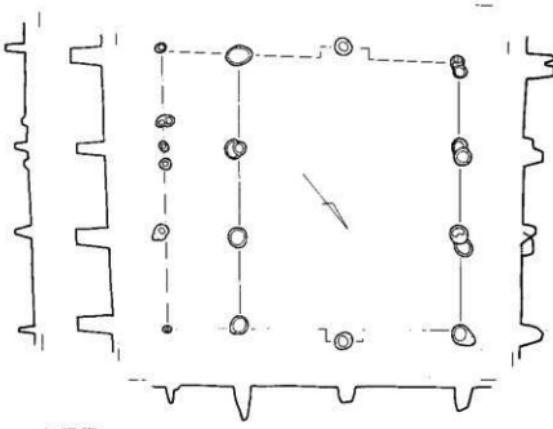
SB 6



L = 200-300m

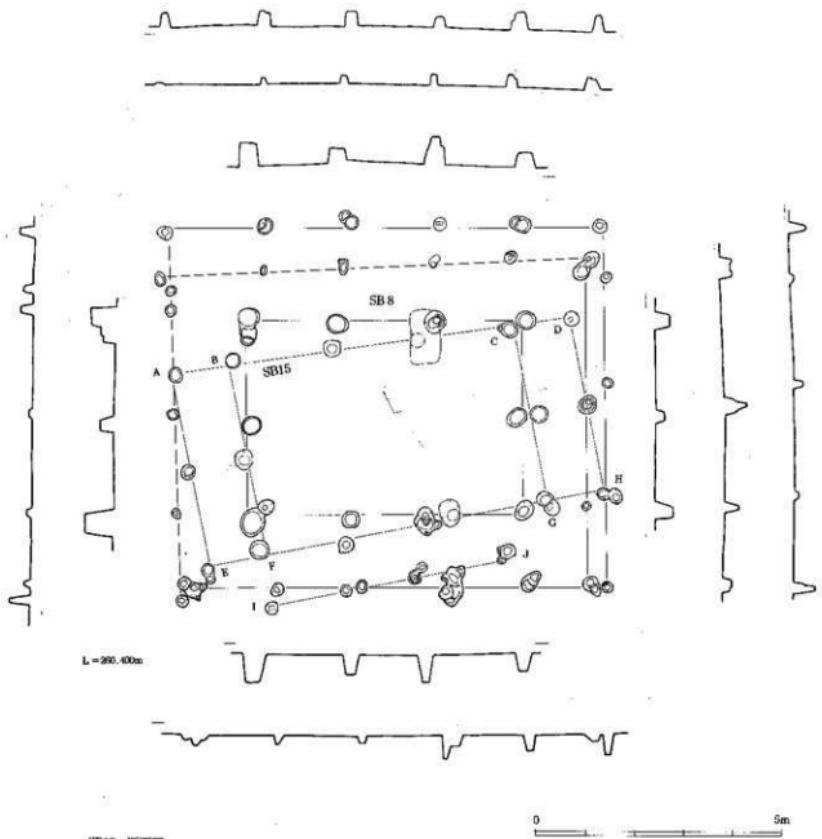
0 5m

SB 7

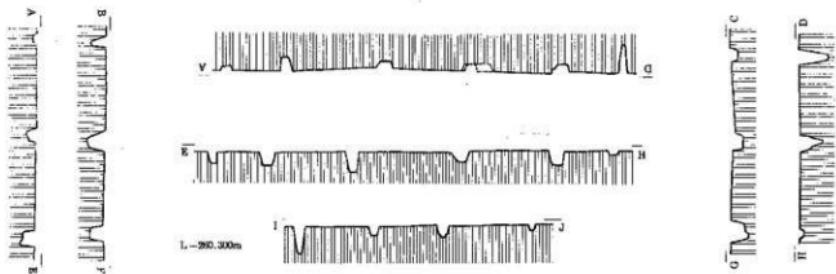


L - 200-300m

第20図 法光寺遺跡 SB 5・6・7 実測図 (1/100)

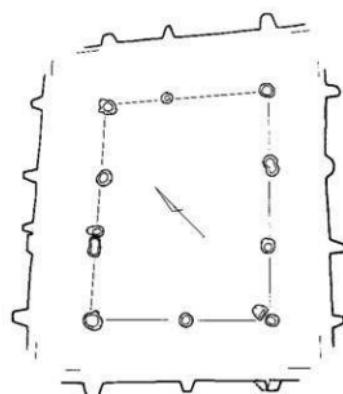


SB15 断面図

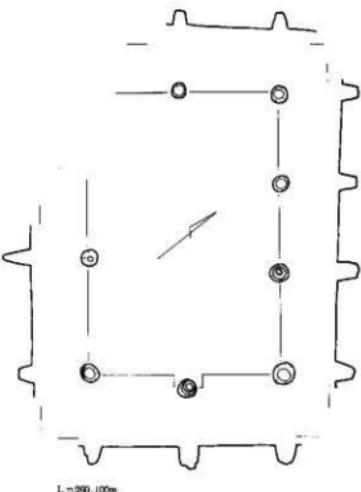


第21図 法光寺遺跡 SB 8・15 実測図 (1/100)

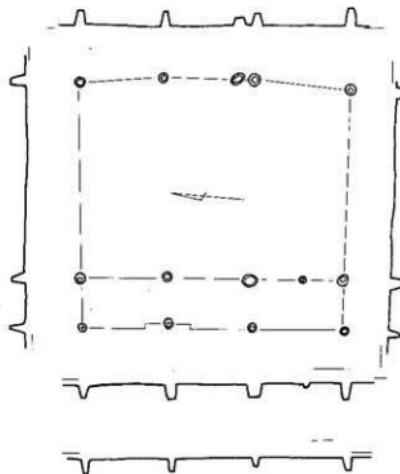
SB 9



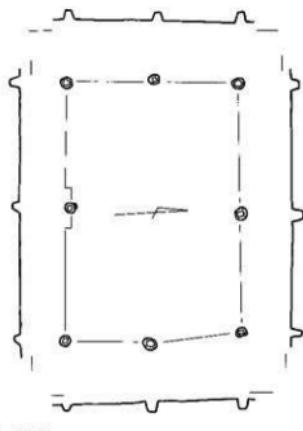
SB10



SB11



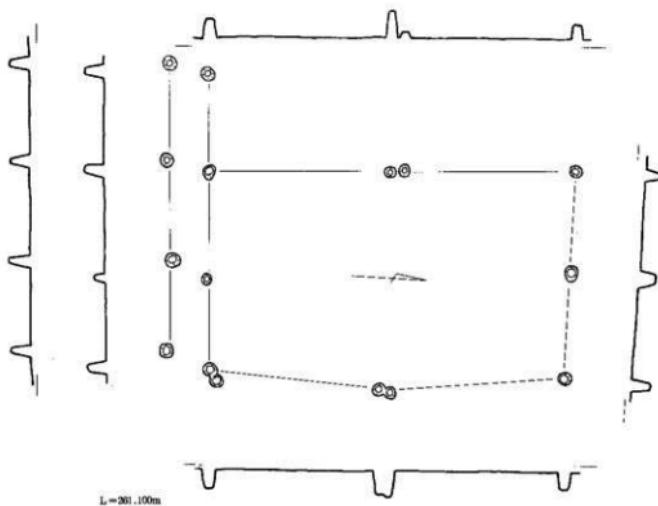
SB12



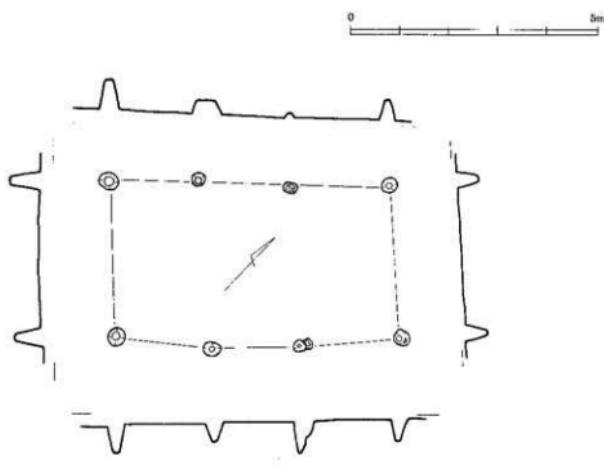
0 5m

第22図 法光寺遺跡 SB 9・10・11・12 実測図 (1/100)

SB13

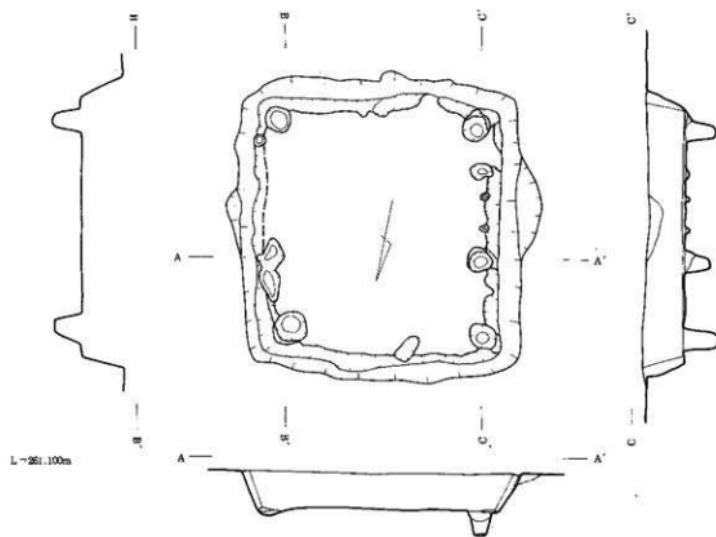


SB14



第23図 法光寺遺跡 SB13・14 実測図 (1/100)

SA 1



0 2m

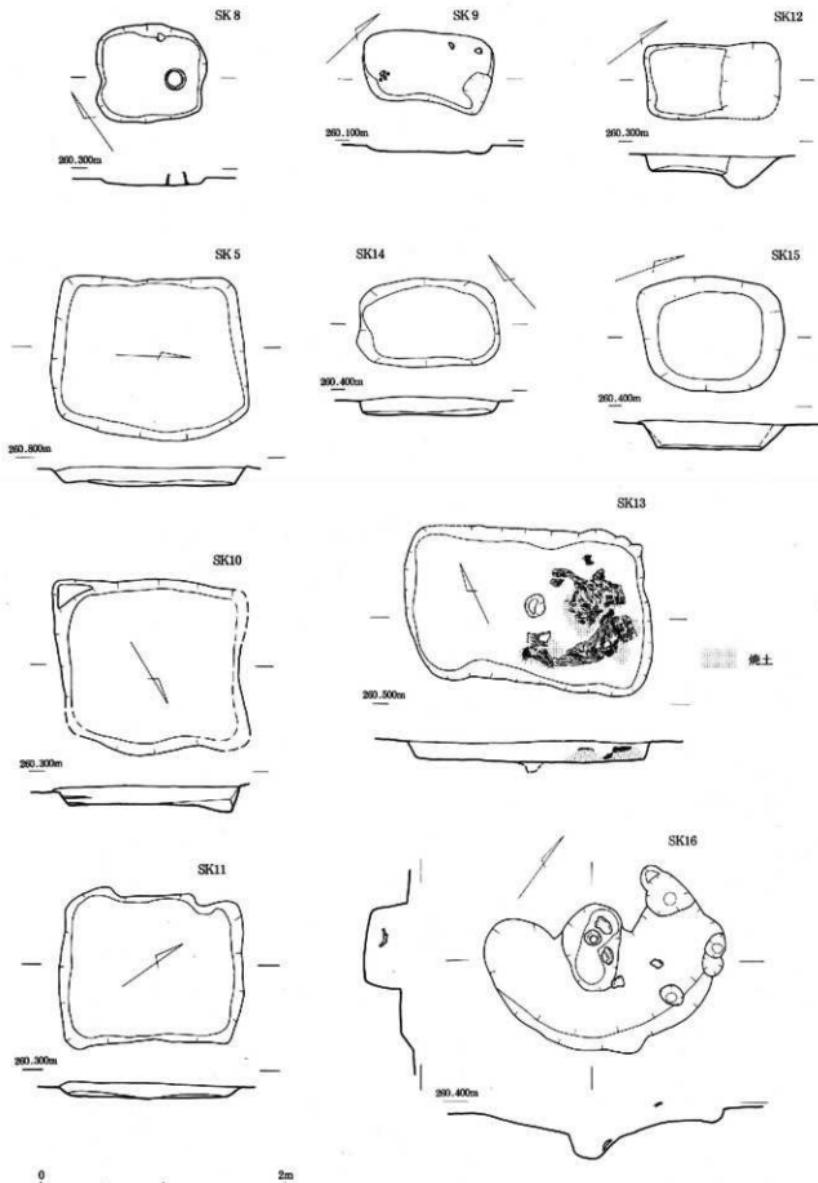
SK 6

SK 7

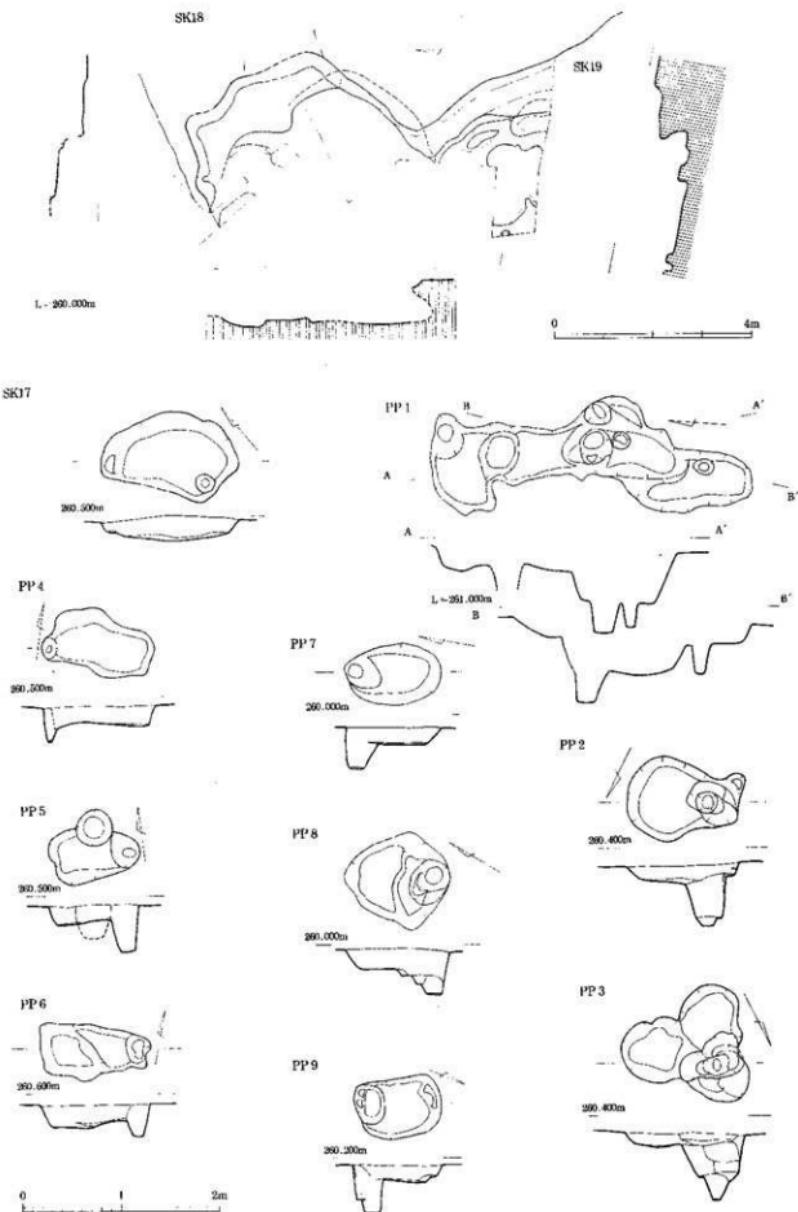
L=26.000m



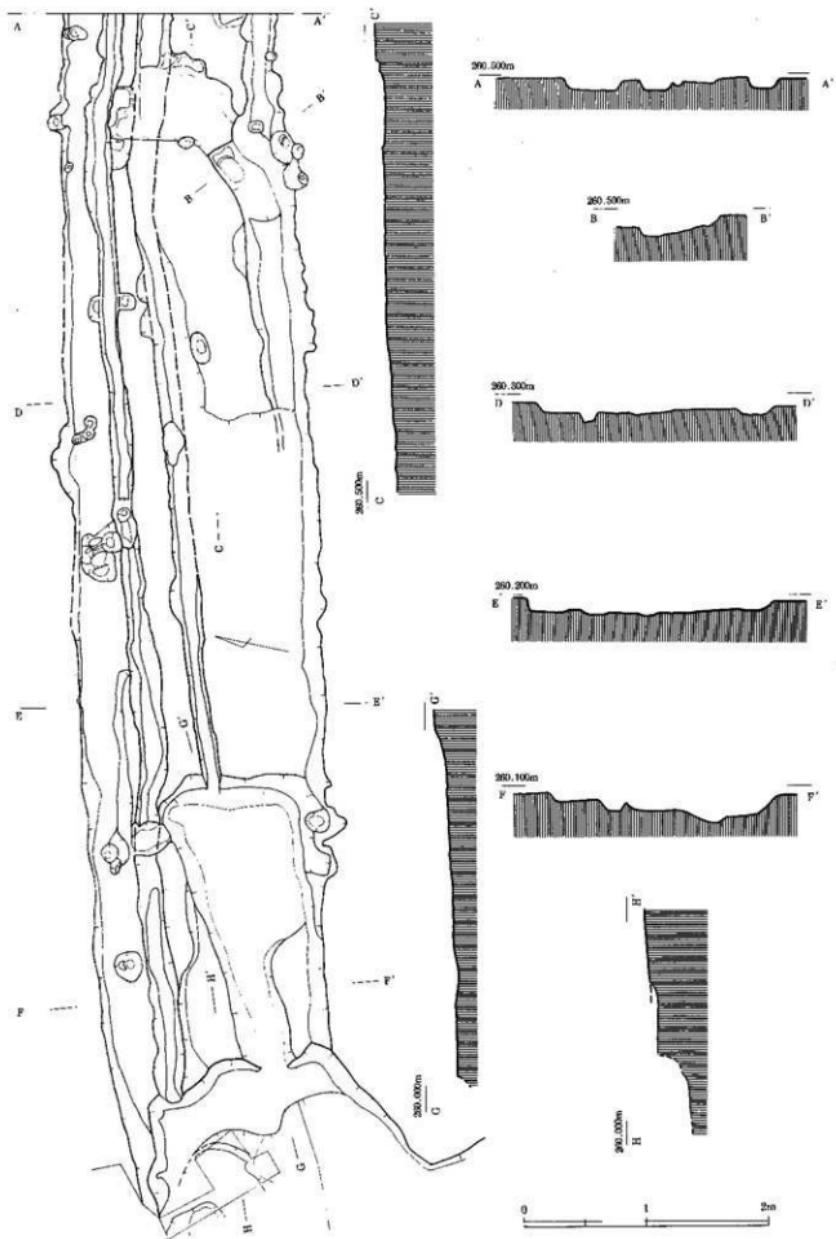
第24図 法光寺遺跡 SA 1、SK 6・7 実測図 (1/40)



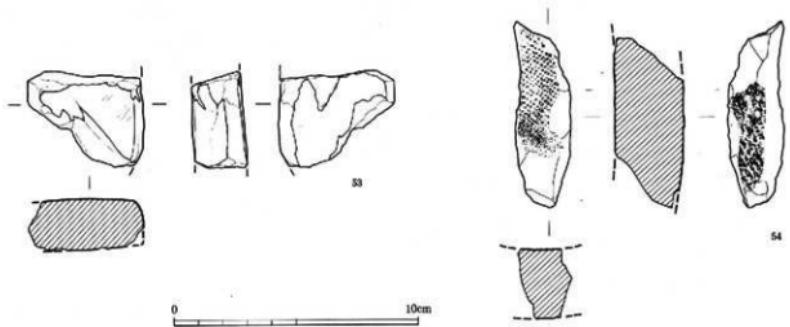
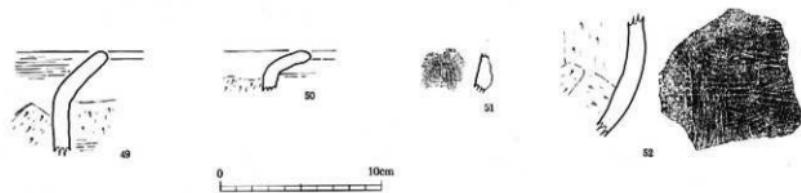
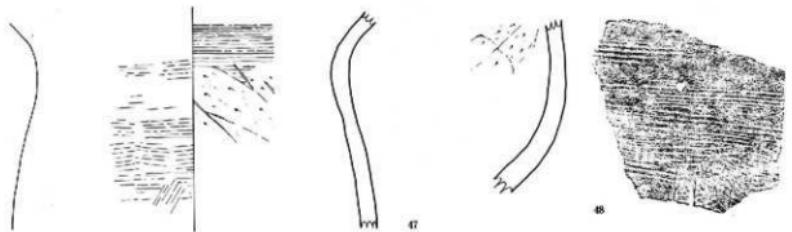
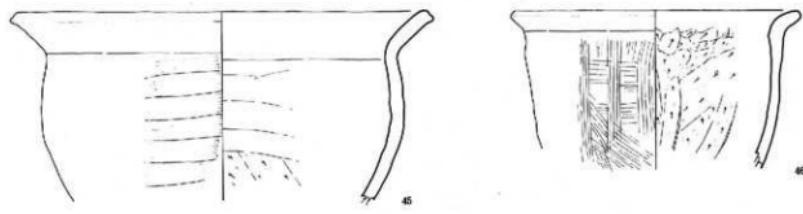
第25図 法光寺遺跡 SK 5・8・9・10・11・12・13・14・15・16 実測図 (1/40)



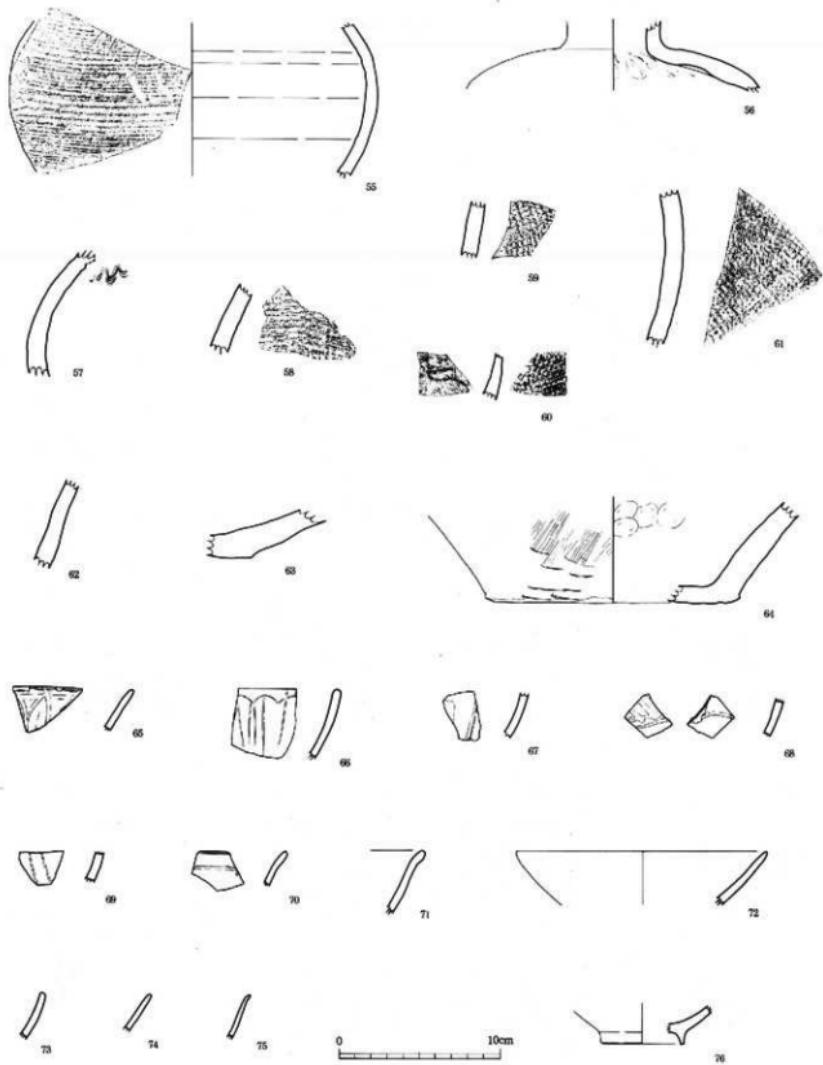
第26図 法光寺遺跡 SK18・19(1/100)、SK17、PP 1～9 (1/50) 実測図



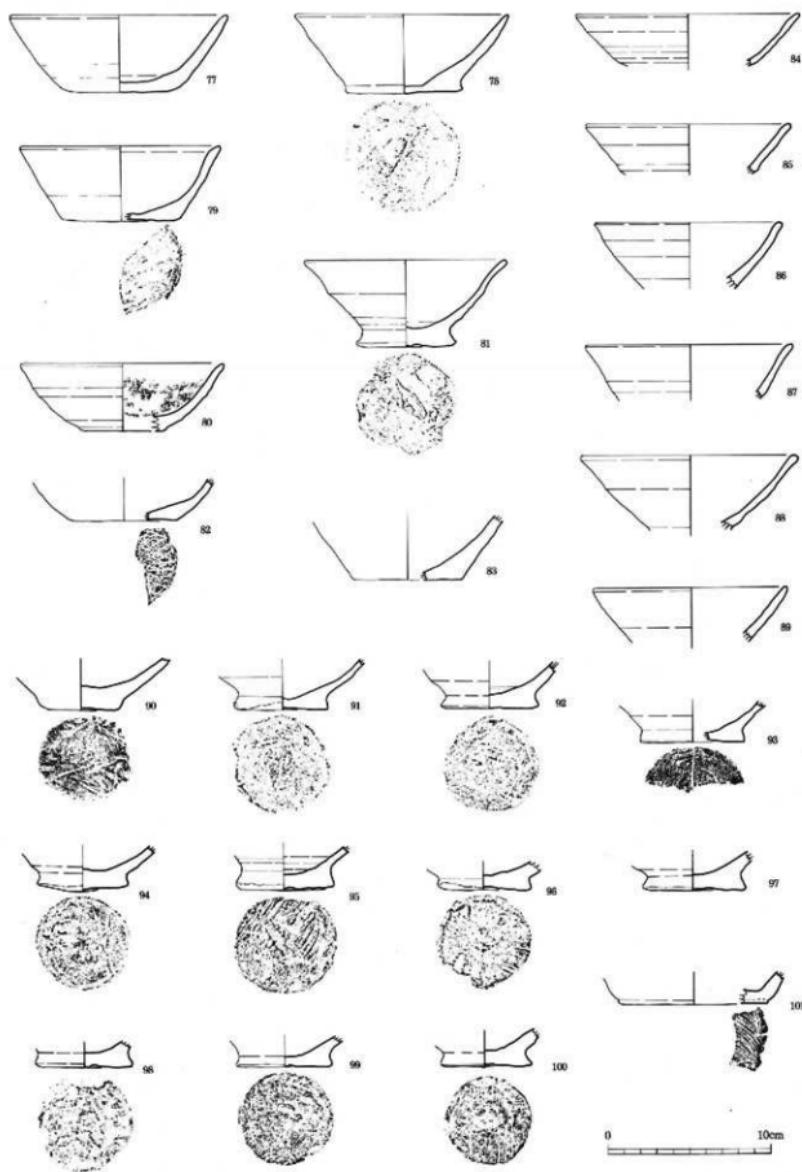
第27図 法光寺遺跡 SD 2 実測図 (1/40)



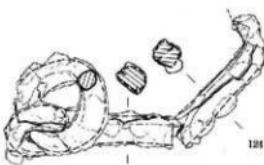
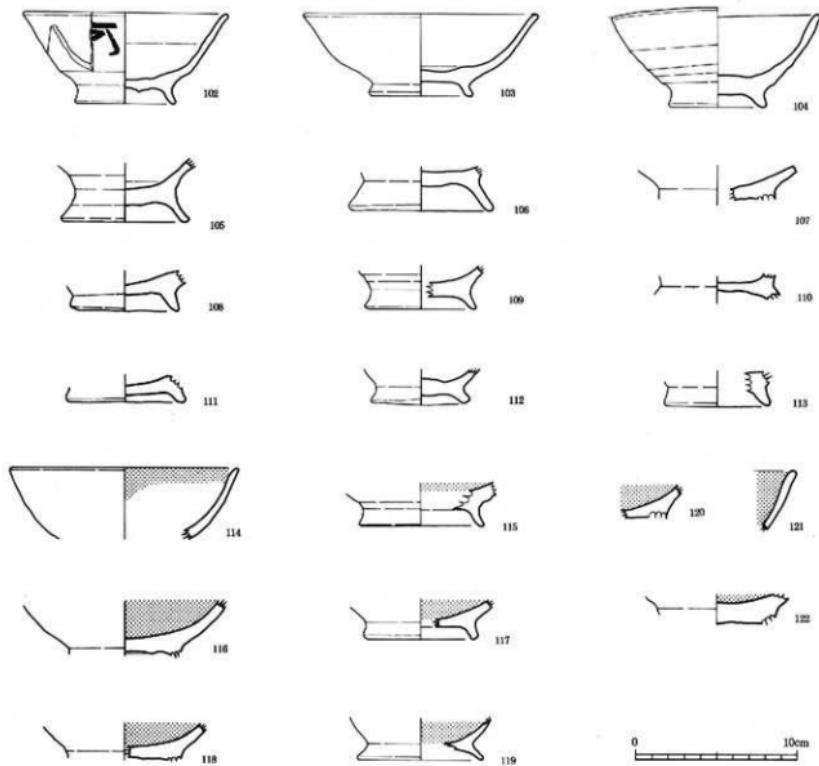
第28図 法光寺遺跡 出土遺物実測図（1）（1/3, 1/2）



第29図 法光寺遺跡 出土遺物実測図（2）（1／3）



第30図 法光寺遺跡 出土遺物実測図（3）（1／3）



第31図 法光寺遺跡 出土遺物実測図(4) (1/3, 1/2)

第7表 法光寺遺跡出土遺物観察表(1)

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	特記事項
				口径	底径	器高	外 面		
45	S K 12	土師器	壺	(25.5)		ヨコH 口縁～胴部	ヨコH 口縁～胴部 工具N ナメ上K	浅黄橙 ヨコH上部 下部ナメ上K	内面 やや風化 残存度 全周の1/7強
46	S K 8	"	壺	18.0		口縁 ヨコN 口縁～胴部	口縁 ヨコN 工具N ナメ上K	明黄褐 褐色 褐色	外面 口縁下はば全面にスス付着 胴部下半は重機掘下げの際に失っている
47	S B 6	"	壺			頭部 ヨコN 頭部～胴部	頭部 ヨコN ヨコHの後N ヨコHの後N	褐色 ヨコH上K ナメ上K	外面 一部スス付着、内面半風化 残存度 頭部全周の約1/6
48	S B 14	"	壺			ヨコ・ナメH	ナメ上?K 口縁	黄褐 褐色	外面 スス付着 内面 やや風化
49	S B 9	"	壺			口縁 ヨコN 口縁 頭部	口縁～頭部 ヨコNの後N 頭部 タテ上K 頭部ナメ上K	褐色 褐色 褐色 褐色	傾き不明 内面 黒変(一部) 外・内面の一部分 やや風化
50	S K 6	"	壺			ヨコN 口縁部	ヨコN 頭部～タテ上K ヨコHの後N	褐色 褐色	
51	S B 6	"	布施上器			欠損	布目痕	黄橙	胎土に2~3mmの細円礫を含む
52	S B 15	"	壺			ヨコ・タテH	タテ・ナメ上K	にぶい褐/明褐	外面 上端部スス付着 内面 やや風化 胎土に0.5~2.5mm(多)、4~6mm(少)の粗砂・細礫含む
53	S D 2	石器	砥 石	最大長 (3.75)	最大人幅 (4.7)	最大人厚 (2.05)		灰白に黄褐色の筋 多数入る	重さ 45.5g 石材 不明
54	D 区	瓦	平瓦片	最大長 (2.35)	最大人幅 (7.6)	最大人厚 (2.85)	平行線T	布目痕	重さ 41.7g 胎土に径0.5~1mmの小孔多数あり、有機質混和物の痕跡か
55	S K 14	須恵器	壺			頭部	ヨコハケN	N	灰黄～灰/灰白 胎土に2~5mmの細礫を極少含む
56	S D 2	"	壺			頭部～胴部	ヨコハケN	N	灰白 内面 頭部～肩部間は指による絞り状成形
57	P - 36	"	壺			頭部	N	N	外面 口縁(欠損)下に櫛描波状文 胎土に径0.5~1mmの粗砂含む 傾き不明
58	S K 19	"	壺			胴部	T	ヨコ ナメ上K	灰/灰黄 傾き不明 当て具の形態不明
59	P P 5	"	壺			胴部	格子目T	N	灰黄/黄灰 "
60	S K 18	"	壺			胴部	格子目T	N	灰～黄褐/灰 "
61	S D 2	"	壺			胴部	格子目T	当て具の上N	黄灰/灰 "
62	S K 18	陶器	壺			胴部	タテ・ナメ上Y	胎:褐灰 ナメ工具N 軸:灰褐	常滑? 備前? 内面の工具はハケ または櫛状 傾き不明
63	S K 18	"	鉢?	(12.0)		底部	N	粗雑な調整 Y	*常滑? 錫倉か? 内面 粒状の胎土や粗砂が付着
64	S K 18	"	壺	(15.8)		胴部～底部	タテ・ナメ上N 底部 粗いN	N. 指押圧	明褐/褐 本錫倉～南北朝頃か?

第8表 法光寺遺跡出土遺物観察表(2)

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外側/内面)	特記事項
				口径	底径	器高	外面		
65	S D 2	磁器	碗 (青磁) 口縁部				Y	Y	胎:灰白 釉:オリーブ灰 傾き不明 剣先鷲蓬弁文 13C 鹿泉窯
66	C 区	"	碗 (青磁) 口縁部				Y(貢入)	Y(貢入)	胎:灰 釉:オリーブ灰 傾き不明 剣先鷲蓬弁文
67	C 区	"	碗 (青磁) 胴部				Y	Y	胎:灰白 釉:綠 傾き不明 文様全体像不明
68	A 区	"	碗 (青磁) 胴部				Y	Y	胎:灰白 釉:綠 "/>
69	A 区	"	碗 (青磁) 胴部				Y	Y	胎:灰白 釉:綠 "/>
70	S D 2 (上層)	磁器	碗 ? 口縁部			口縁端部露胎	口縁端部露胎	胎:灰白 釉:灰白	"/>
71	A 区	"	口縁部				Y(貢入)	Y(貢入)	胎:灰白 釉:オリーブ灰 土緑口縁
72	P - 65	"	碗 (白磁) 口縁-胴部	(5.4)			Y	Y	胎:灰黄 釉:灰オリーブ 越州窯 10~11C
73	C 区	"	碗 (青磁) 口縁部				Y(貢入)	Y(貢入)	胎:灰白 釉:灰オリーブ "/>
74	表 土	陶器	碗 口縁部				Y	Y	胎:黄灰 釉:褐灰 黄褐色 傾き不明?
75	S K 19	磁器	碗 口縁部				Y(貢入)	Y(貢入)	胎:白 釉:白 傾き不明 外面やや風化 薩摩焼?
76	A 区	"	碗 胴~底部	(4.9)		Y(貢入) 疊付 露胎	Y(貢入)	胎:白 釉:白	残存度1/4弱
77	S K 16	土師器	坏	(13.2)	(7.8)	4.8	N	N	浅黄櫻/淡黄 内面一部スス付着
78	S K 16	"	坏 口縁~底部	13	7.1	5	N	N	浅黄櫻~ にぶい櫻 にぶい桜 にぶい桜 ヘラ切り離し後N
79	S B 8	"	坏 口縁~底部	(12.2)	(7.2)	(4.7)	N	N	浅黄櫻~ 櫻 底部 指押え ヘラ切り離し その後N?
80	S K 16	"	坏 口縁~底部	(12.6)	(5.2)	(4.2)	N	N	浅黄櫻 内面 赤色顔料付着
81	P - 36	"	塊 口縁~底部		6.2	5.4	N	N	浅黄櫻~ にぶい櫻 にぶい桜 ヘラ切り離し
82	S B 9	"	坏 胴~底部		(6.6)		N	N	灰黃褐色 底部外面ヘラによる斜格子状の線描 あり。器面調整のためか
83	S B 8	"	坏 ? 胴~底部	(6.6)			N	N	にぶい櫻~ にぶい桜 底部中央器厚はかなり薄いと推定さ れる 土師器中とくに堅硬
84	S B 8	"	坏 口縁~胴部	(13.7)			N	N	淡黄~ 黄櫻 淡黄~ 黄櫻
85	S B 6	"	坏 口縁~胴部	(12.6)			N	N	淡黄~ にぶい黄

第9表 法光寺遺跡出土遺物観察表(3)

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	特記事項	
				口径	底径	器高	外 面			
86	S B 6	土師器	塊 口縁・側部	(11.4)		N	N	浅黄橙		
87	S B 15	"	塊 ? 山形・側部	(12.75)		N	N	浅黄橙～ にぶい黄褐		
88	S K 8	"	塊 口縁・側部	(13.0)		N	N	浅黄橙		
89	S B 9	"	塊 口縁・側部	(11.8)		N	N -部 ナナメ	にぶい黄橙		
90	S B 10	"	塊 ? 胴～底部		4.75	N	N	浅黄橙	底部 ワラ状植物の圧痕	
91	S B 6	"	塊 胴～底部		5.7	N	N	浅黄橙～ 黄橙	ヘラ切り離し後N 底部中央に工具による傷	
92	K 6	"	塊 胴～底部		6.05	N	N	にぶい黄橙／淡黄	ヘラ切り離し	
93	S K 9	"	塊 胴～底部	(6.4)		N	N	浅黄橙～ 黄橙	ヘラ切り離し	
94	S B 8	"	塊 胴～底部		5.6	N	N	にぶい黄橙 ～淡黄	ヘラ切り離し	
95	S B 14	"	塊 胴～底部		6.1	N	N	黄橙 にぶい黄橙	ヘラ切り離し	
96	C 区	"	塊 底 部	(5.3)		N	N	灰白／淡黄	底部 一部に検出時の削傷あり。切 り離しは回転させながら工具を中心 方向に差し入れて行っている。	
97	P - 36	"	塊 底 部		6.4	N	N	浅黄橙～ にぶい黄褐	底面風化に著しい	
98	S D 2	"	塊 底 部		6.0	N	N	浅黄橙～ 灰白	ヘラ切り離し	
99	C 区	"	塊 底 部		5.75	N	N	浅黄橙	ヘラ切り離し	
100	S D 2	"	塊 底 部		5.6	N	N	浅黄橙～ 淡橙	ヘラ切り離し 底部に乾燥時の板目痕？	
101	S B 13	"	皿 ? 胴～底部	(9.0)	N?	N	N	浅黄橙 にぶい黄橙	糸切り離し 外面やや風化	
102	S B 8	土師器	高台付塊 (裏面上部) 口縁～底部	(12.5)	5.9	5.7	N	浅黄橙～ 下部不定角のN にぶい黄橙	浅黄橙 外面に墨書「可」	
103	S B 14	土師器	高台付塊 (完形)	(14.6)	(6.4)	5.1	N	N	にぶい黄橙 暗灰褐 にぶい黄褐	内外面にスヌ付着
104	S K 16	"	高台付塊 (完形)	12.8	6.1	6.2	N	N	浅黄橙	内外面一部にスヌ付着
105	S B 10	"	高台付塊 胴～底部	(7.65)		N	N	明黄橙～ 淡黄	明黄橙～ 淡黄	
106	表 土	"	高台付塊 底 部	(8.6)		N	N	淡黄～ にぶい黄橙	淡黄 全体的に表面風化	

第10表 法光寺遺跡出土遺物観察表(4)

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	特記事項
				口径	底径	器高	外 面		
107	S D 2	土師器	高台付塊 底 部			N	N	橙	
108	C 区	"	高台付塊 底 部	(6.5)		N	N	灰白～ にぶい橙 / 灰白	
109	P P 5	"	高台付塊 底 部	(6.6)		N	N	淡黄～ にぶい黄 / にぶい黄	
110	C 区	"	高台付塊 底 部			N	N	浅黄橙	風化著しい
111	S D 2	"	高台付塊 底 部	(7.0)		N	N	浅黄橙 / 灰白	
112	S B 8	"	高台付塊 底 部	6.2		N	N	淡黄～ 黄 / 淡黄	
113	C 区	"	高台付塊 底 部	(6.6)		N	N	淡黄	
114	S B 7	" (内黒)	塊 口縁～脚部	(4.15)		ていねいなN	M	淡黄 / 灰白～ 灰	口縁部付近のみ黒変
115	C 区	" (内黒)	高台付塊 底 部	(7.8)		N	M	浅黄橙 / 褐灰	
116	S B 10	" (内黒)	高台付塊 脚～底部			N	M	浅黄橙 / にぶい橙 / 黑灰	内面 風化に著しい
117	C 区	" (内黒)	高台付塊 底 部	(6.3)		N	M	灰白 / 黑褐	外面 茶色の斑点状の付着物
118	S B 6	" (内黒)	高台付塊 脚～底部			N	M	浅黄 / 黑褐 浅黄橙 / 灰黄	ヘラ切り離し後N
119	C 区	" (内黒)	高台付塊 底 部	(7.65)		N	M	浅黄橙 / 黑褐	
120	P - 62	" (内黒)	高台付塊 底 部			N	M	浅黄橙 / 黑褐	
121	S K 9	" (内黒)	塊 口縁部			N	M	浅黄橙 / 褐灰	
122	C 区	" (内黒)	高台付塊 底 部			N	M	浅黄橙 / 青黒	
123	S B 15	鐵器 刀子	長さ (3.15)	最大幅 1.05	最厚さ 0.16				
124	S B 6	鐵器 轉 (馬具)	長さ (35.4) ~	最大幅 (1.10)	最大厚 (0.90)				

#### 粘土採掘土坑（第6表、第26図）

法光寺遺跡の粘土採掘土坑は連結する2基が検出されたが、部分的に掘り下げたのみで全容がわからず切り合いで、その内側にははっきりせず、ほぼ同時に掘り下げられたと思われる。埋土や遺構の所見は藏元遺跡例と共通しており、アカホヤ、黄褐色土、暗褐色土、黒色土、白～淡褐色粘質土の小塊～ブロックが混在する土で埋め戻されており、遺構の形状は袋状を呈している。SK19北東壁は、藏元遺跡の溝状遺構SD15のようにアカホヤが崩落している部分が見られた。

遺物は、SK18から須恵器壺片や中世の鉢・甌の底部(60・62・64)が、SK19から須恵器壺片(58)等が出土している。

#### 出土遺物について（第28～31図、第7～10表）

法光寺遺跡において、遺物は平安時代を中心に中世までのものが出土しているが、とくにSB8の柱穴から出土した墨書き器(102)、D区で出土した布目瓦片(54)は注目される。

墨書き器の文字は、破損しているので確定できないが、「可」または「阿」等が考えられる。

供膳具は、壺、高台付き壺・塊、内黒の高台付き塊が出土している。破片のために全体形がわからないものが多く、形態がわからっても壺と塊を明確に区別できないものもあった。底部を切り離しているものは、ほとんどがヘラ切りである。

壺には底部外端が聞く円盤高台のもの(78)があり、塊も底部が厚い円盤高台のもの(81・91～97)が多い。後者は、外形上は輪高台をもつものと似ている。高台付きの塊・壺には、断面三角形の輪高台が付くもの(104・108・111・113)と内黒のもの(114～122)がある。円盤高台をもつタイプは9世紀後半から10世紀前半にかけて現れる形態で、SK16ピット内でその78と共に出土した104も同じ時期と考えられる。

同じくSK16内で出土した80は、内面に赤色顔料が比較的厚く付着している。

82は底面にヘラ状の工具による斜格子状の調整がある。

101は本遺跡出土土器器中、唯一糸切りの痕跡が認められるものである。

以上の他の遺物の所見については、遺物観察表を参照されたい。

## 4. 中溝遺跡

### 1. 調査の経過

中溝遺跡では、農地部分(A～E区、第32図)を調査したが、このうちD・E区の調査の内容は、試掘後に重機で表土を剥ぎ、アカホヤ面で遺構の無いことを確認した、というものの、実質的には調査を実施したのはA・B・Cの三区である。

E区では、北西部と北東部でアカホヤ面が検出されたが、その間～南部にかけては黒色土が厚く堆積していた。また、北西縁辺ではアカホヤ面はわずかに残るのみでその下の礫層が現れた。このことにより、以西は調査対象外とした。

D・E区の北側の区画については、隨所にトレンチを設定し掘り下げたが、見るべき遺構・遺物はなかった。

調査中にも、道路を挟んだ南側の工事予定地の遺跡の存否を確認するための試掘調査を行なっている。トレンチはT1～11を設定したが、表土からわずかに陶磁器片等が出土したのみで、遺跡はない判断して調査は実施しなかった。

A～C区の調査を開始すると、予想よりもかなり新しい時代の遺構・遺物が検出された。そのため、調査期間の事情も合わせ、ほとんどの遺構は半蔵や一部掘り下げに留め、特に重要なものだけ光撒することにした。

### 2. 包含層の状況

中溝遺跡では、全体に過去の農地開発時の削平を受けており、II～III層が残るのは原地形が谷状に落ち込むB区の中～南部とA区の北西部、先述のE区だけであった。II層黒色土は、ここでは他の二遺跡と違い、遺物包含層といえるほどの包含量はない。調査前の試掘時にA区東端で表土から黒曜石製石鎌が1点出土したことから縄文時代の包含層存在の可能性も念頭に入れつつ調査したが、この他は遺構・遺物ともに皆無であった。

A区北東部とC区北辺部では表上下に礫層が露出しており、調査対象外とした。原地形の高かった部分と考えられる。

B区では、中央～南部の黒色土の上層部にシラスが大量に混じる整地層(客土層)があり、遺構の精査が困難なので、とくに土層の状態が悪い南側中央部分は10cmほどさらに掘り下げて精査した。

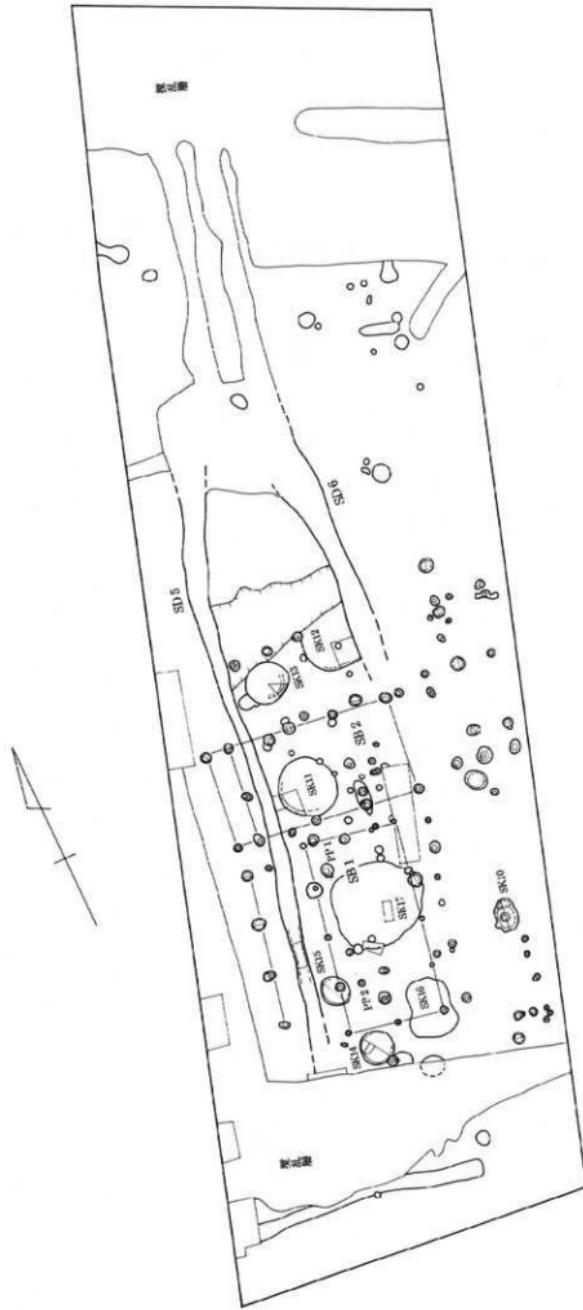


第32図 中溝道防護柵配置図 (1:10,000)

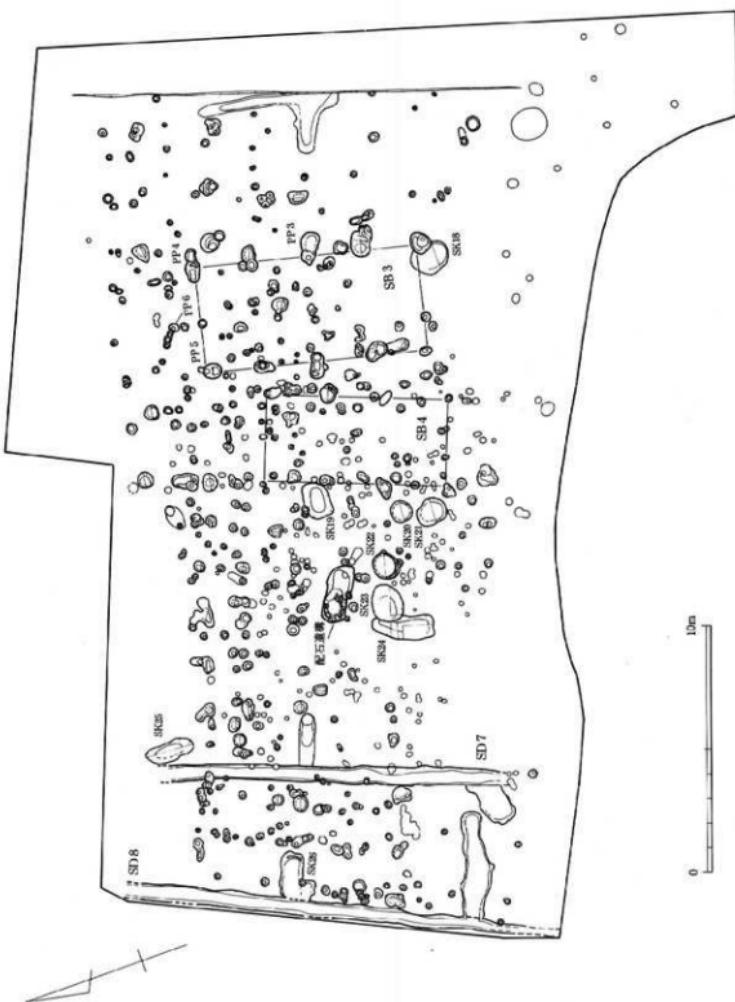


第33図 中瀬遺跡 A区 遺構分布図 (1/200)

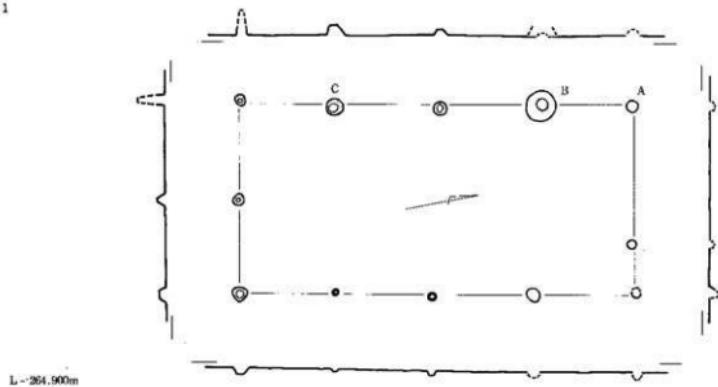
10m



第34图 中塘围场 B区 遍耕分布图 (1/200)

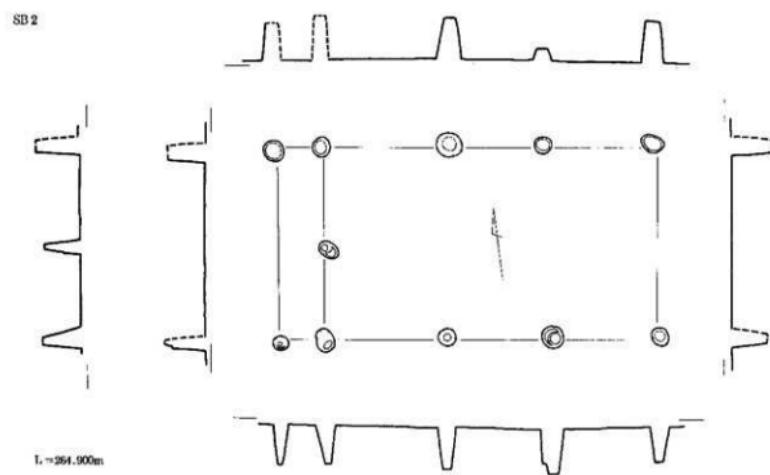


SB 1



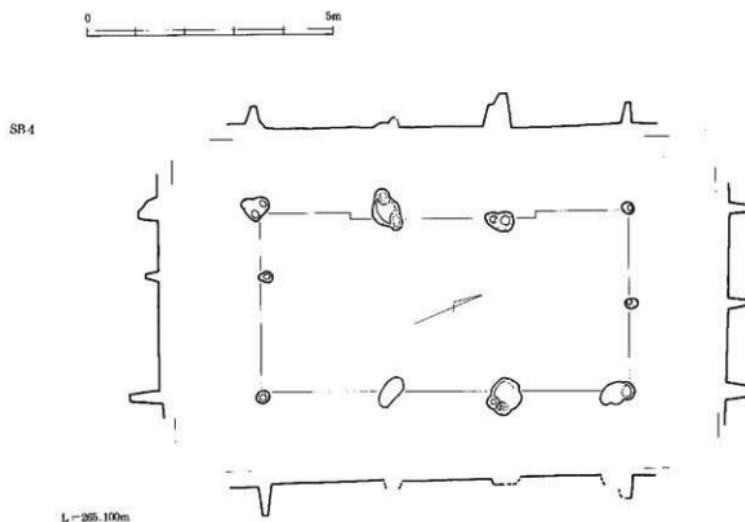
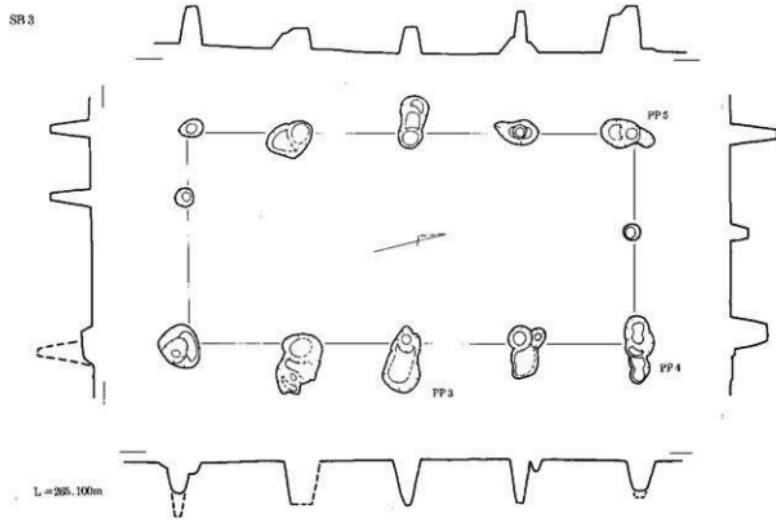
L = 264.900m

SB 2



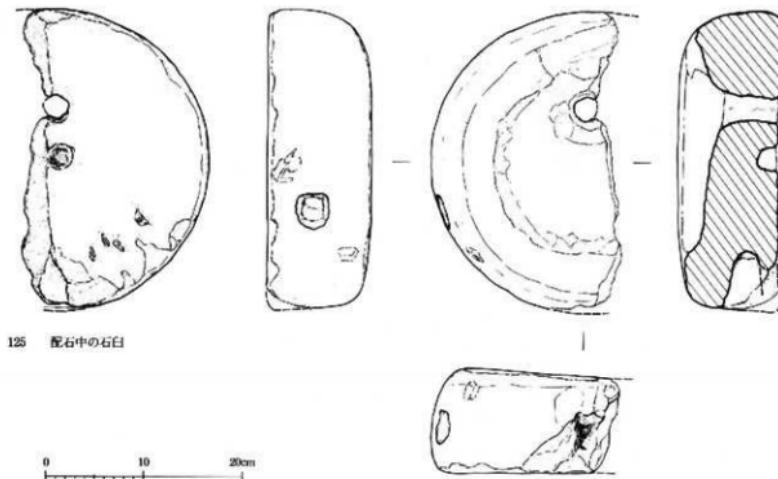
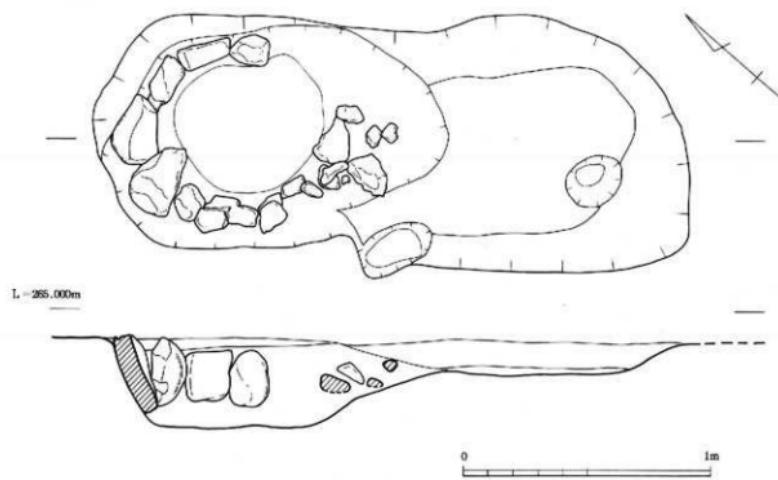
L = 264.900m

第36図 中溝遺跡 SB 1、SB 2 実測図 (1/100)

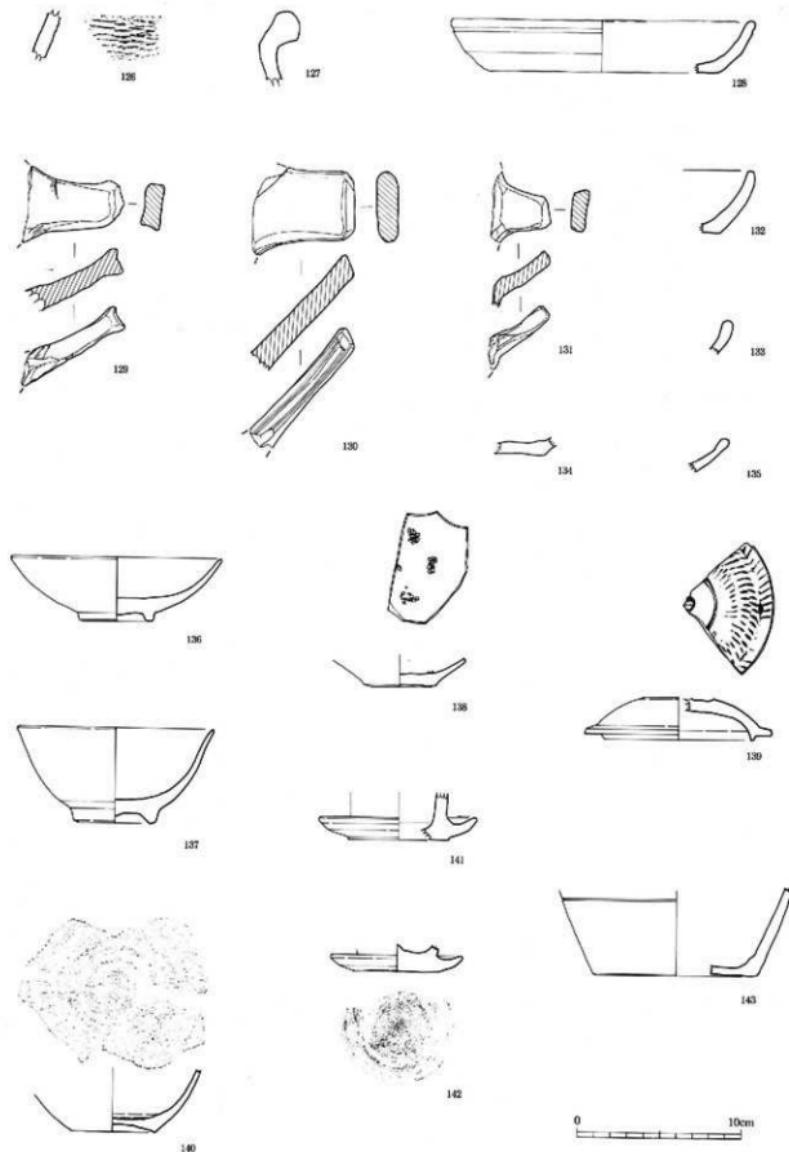


第37図 中高遺跡 SB 3、SB 4 実測図 (1/100)

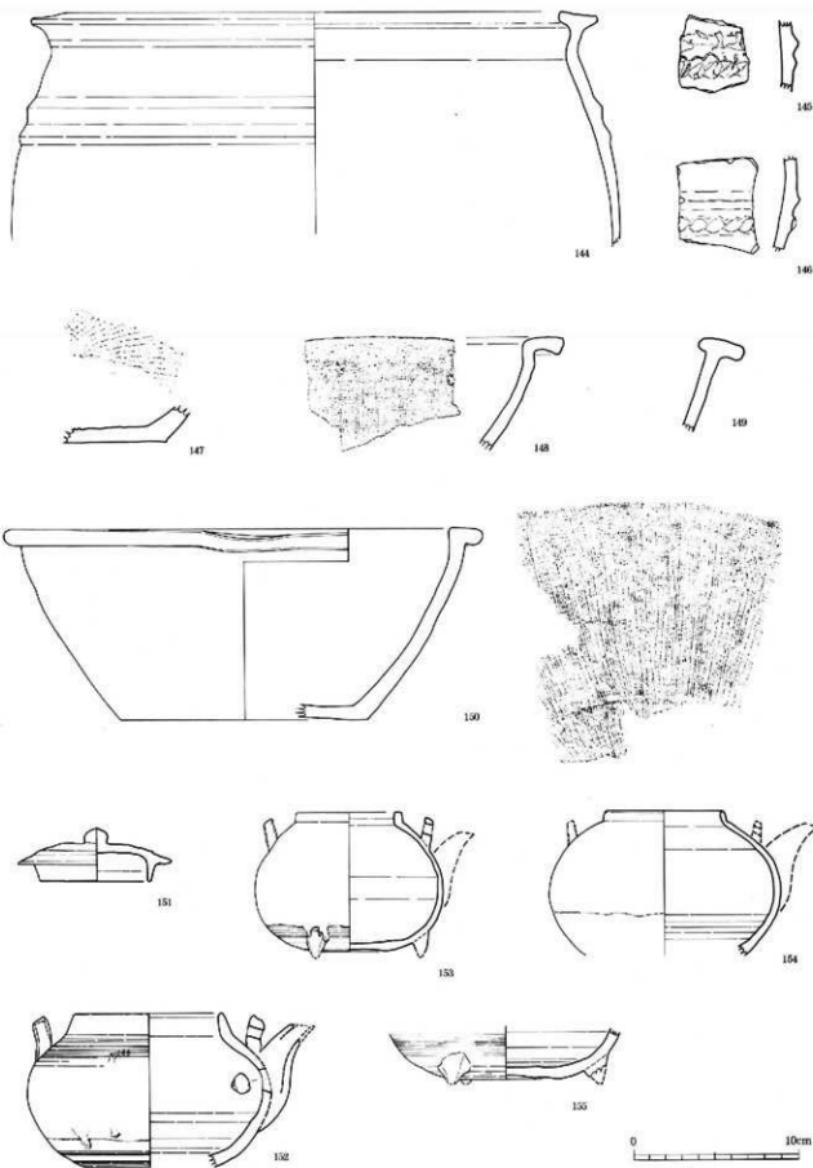
配石遺構



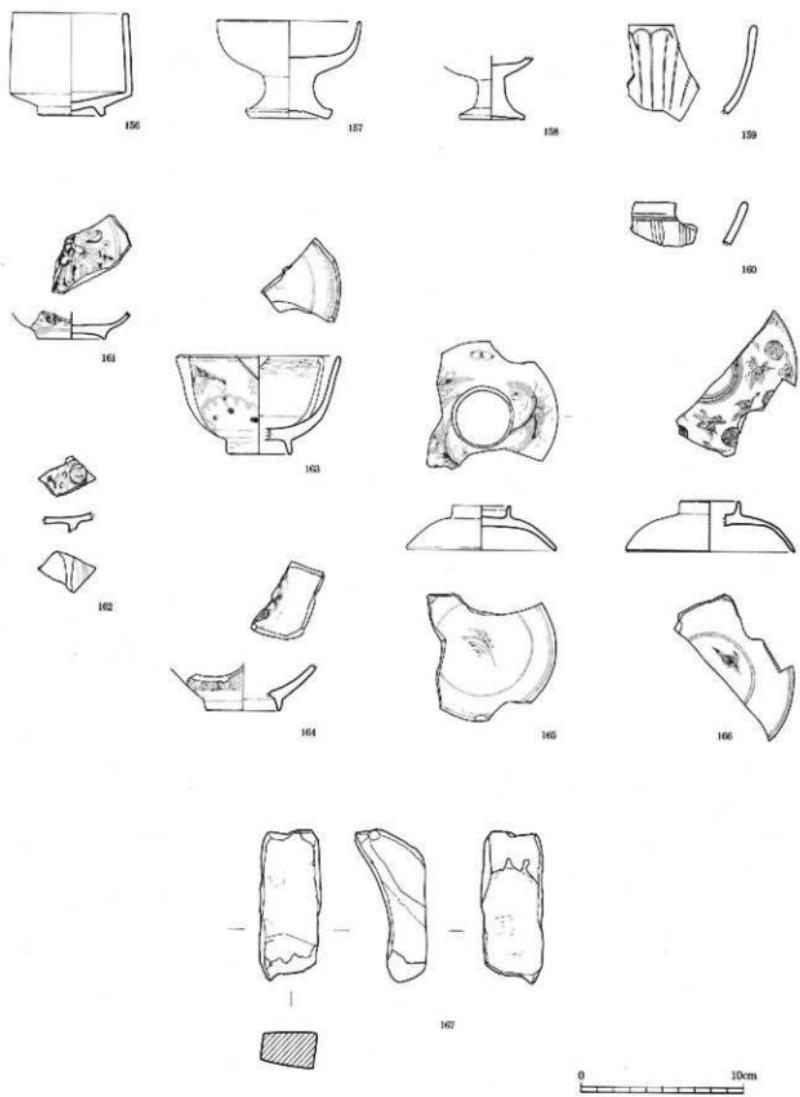
第38図 中溝遺跡 配石遺構 (1/20)・石臼 (1/5) 実測図



第39図 中満遺跡出土遺物実測図（1）（1/3）



第40図 中溝遺跡出土遺物実測図（2）(1/3)



第41図 中溝遺跡出土遺物実測図（3）（1/3）

第11表 中溝遺跡出土遺物観察表(1)

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	
126	不明	須恵器	壺 胴部			ヨコ平行Tの底 ナナメ工具N	N	褐灰	
127	T1表土	土器 (時期不明)	壺 口縁部			ヨコN	ヨコN	暗赤褐色	褐土鍋か
128	A区	"	培焰 口縁~底部	[18.0]	[13.8]	3.25	ヨコN	ヨコN	浅黄橙
129	搅乱層	"	培焰 把手			N		浅黄橙	スス付着 指印えん
130	S Z 1	"	培焰 把手			ヘラM		浅黄橙 黒	
131	搅乱層	"	培焰 把手			N		橙	
132	P-33	"	培焰 口縁~底部			N	ヨコN	橙~黒褐色	
133	A区	"	培焰 口縁部			ヨコN	ヨコN	にぶい赤褐色	にぶい橙~外面にスス付着
134	搅乱層	"	培焰 底部			ヨコN	ヨコN	にぶい橙	ヘラ切り離し後 工具N
135	S K 5	"	培焰 口縁部			ヨコN	ヨコN	浅黄橙	
136	P-31	陶器	碗 口縁~底部	[12.8]	4.3	3.9	Y 豊富露胎	胎:灰白 胎:目輪ハギ 胎:灰白	*八代~人吉産か 18~19C
137	P-21	"	碗 口縁~底部	[12.1]	[5.0]	5.9	Y 底部・豊富露胎	胎:橙 胎:目輪ハギ 胎:暗赤褐色	*南九州産18C~幕末
138	S K 15	"	碗? 底部		4.4	N	Y	胎:にぶい黄褐色 胎:暗褐色	系切り離し、内面に重ね積み用の粗砂が残る。*薩摩厚焼18~19C
139	A区	陶器	蓋	内径 (8.8)		Y	N	胎:にぶい黄褐色 胎:明黄褐色	外面にトビガンナによる文様
140	搅乱層	"	罐 鉢 胴~底部		5.12	上部Y 下部N	Y ナナメ横筋条帶	胎:にぶい赤褐色 胎:暗褐色/暗赤褐色	
141	S Z 1	"	燭台	受部 (6.2)		Y (鉄軸) 受部外面露胎	Y	胎:明赤褐色~黄灰色 胎:暗赤褐色~灰褐色	
142	A区	"	燭台	受部 (4.9)		Y 受部外面露胎	Y	胎:にぶい褐色~橙褐色 胎:黄褐色~にぶい黄褐色	系切り離し 南九州産18C~幕末
143	S K 7	"	壺	胴~底部 (9.8)		Y	N	胎:褐 胎:灰~灰褐色	外面に沈線
144	A区	"	壺	口縁~胴部 (30.0)		Y 口縁部・ヨコ	Y	胎:にぶい赤褐色 胎:にぶい黄褐色	外面 突帯2条
145	B区 搅乱層	"	壺	胴部		Y	Y	胎:にぶい赤褐色 胎:オリーブ黒	外面 突帯2条、下部突帯には連続刻み目 薩摩燒頬き不明
146	搅乱層	"	壺	胴部		Y	Y	胎:明赤褐色 胎:オリーブ黒	外面 突帯2条、下部突帯には連続刻み目 薩摩燒頬き不明

第12表 中溝遺跡出土遺物観察表(2)

遺物番号	出土位置	種別 器種	法量(cm)		器面調整		色調 (外側/内側)	特記事項
			口径	底径	高	外面		
147	S D 3	陶器	擂鉢	底部	Y	Y カキ目	胎:赤褐色 釉:灰	底部内面中央に同心円状カキ目 底部外面中央一部露胎
148	A 区	"	擂鉢	口唇~脚部	T.R.Nの上にY	T.R.Nの上にY カキ目	胎:にぶい赤褐色 釉:黒褐色	工具はハケ棒のもの 薩摩焼 18~19C
149	"	"	擂鉢	山唇~脚部		Y	胎:にぶい褐色 釉:黒褐色~灰黃褐色	頬き不明 薩摩焼
150	A区,B区 搅乱層	"	擂鉢	(25.4) (15.2) 山唇~底部	ハケ棒の上にY カキ目	Y (全体ぼらら) カキ目	胎:暗赤褐色 釉:暗赤褐色	
151	S B 3 P P 4	"	土瓶	6.45 山唇~脚部	3.2	Y	N	胎:黒褐色~にぶい褐色 釉:黒褐色~暗褐色
152	S B 3 P P 5	陶器	土瓶	9.0 山唇~脚部	ハケ棒の上Y 底部露胎	Y	胎:橙 釉:褐	外面 上部7.9cm (上下幅) に施釉 底部外側スス付着
153	搅乱層	"	土瓶	(5.6) (4.4) 山唇~底部	8.6 底部露胎	Y	胎:にぶい橙褐色 釉:黒褐色~オーランド	外面上部7.4cm (上下幅) に施釉 底部外側スス付着
154	S B 3 P P 4	"	土瓶	(7.4) 山唇~脚部	Y 底部露胎+スス付着	Y	胎:明赤褐色 釉:にぶい褐色	注:口部を欠く、胴部残存1/4 外面上部6.3cm (上下幅) に施釉
155	S B 3 P P 5	"	土瓶	5.9 底部	N スス付着	N	にぶい赤褐色/灰黃	
156	S K 9	"	青形茶碗	口唇~底部	7.15 (4.2) 6.35	Y 疊付露胎	Y	胎:灰白色 釉:灰白色
157	P P 6	"	仏飯器	口唇~底部	8.65 (4.8) 6.0	Y 疊付露胎+毛脚部	Y	胎:にぶい褐色 釉:オーリーブ褐色
158	S Z 1	磁器	仏飯器	环唇~脚部	3.9	Y 底部露胎	Y	胎:灰白色~浅黃褐色 釉:灰白色
159	A 区 (青磁)	"	碗	口唇~脚部		Y (貫入)	Y (貫入)	胎:灰黃 釉:オリーブ灰 刻先蓮弁文 **中国産 15C後半~16C前半
160	P - 43 ( " )	"	碗	口縁部		Y (貫入)	Y (貫入)	胎:灰白色 釉:オリーブ灰 頬き不明
161	P - 41 (染付)	"	碗	脚~底部	(4.1)	Y 疊付露胎	Y	胎:白 釉:白
162	P - 37 (染付)	"	皿	底部		Y	Y	胎:白 釉:灰白色
163	S Z 1 (染付)	"	碗	口唇~底部	(9.8) (3.6) 6.15	Y 疊付露胎	Y	胎:灰白色 釉:灰白色
164	C 区 (染付)	"	碗	脚~底部	(4.4)	Y 高台下半露胎	Y	胎:白 釉:灰白色
165	A 区 (染付)	"	蓋?	(9.2) (3.6) 2.8		Y 疊付露胎	Y	胎:白(やや灰色) 釉:白(やや青灰色)
166	P P 6 (染付)	"	蓋?	(10.4) (3.6) 3.17		Y 疊付露胎	Y	胎:白 釉:白(やや灰色) 肥前 18C末?
167	S Z 1	石器	底石	最大長大幅 最大厚	9.4 3.8 2.25			黄灰に黄褐色の筋多 数入る 石材不明(隙孔多数有)

### 3. 検出した遺構と遺物（第33～35図）

A区では、近代のものと思われる遺構や遺物が検出されたが、性格の明らかな遺構は少なく、遺物にもかなり新しい（現代か）とみられるものが含まれた。

B・C区では、掘立柱建物4棟とピット群、溝状遺構、円形土坑などが検出され、遺物は近世末から近代の陶磁器を中心に出土しているが、わずかに中世のものも含まれる。

柱穴は、時間の経過が浅いため、概して柱部分の埋土が散らかく、空洞に近い状態のものや柱の木質部の一部が残るものもあった。建物廃棄後に柱の抜き取り・埋め戻しを行なっていないのであろうか、柱穴が埋土で充たされていく過程を考える上で興味深い。

以下、検出した遺構のうち、特記すべきものだけ限定して報告する。

#### 土坑

七坑は各区で検出されたが、大小の円形の土坑が多く見られる。それらの埋土はアカホヤや白色粘土のブロック、シラス等が黒褐色土に混じるもので、中には近現代の搅乱土坑も含まれている。

#### ピット

B・C区では多くのピットが検出された。埋土を分類・記録しながら調査したが、ピットの配置や同様性を分析した上での建物や施設の復元は困難な作業であり、掘立柱建物4棟以外の施設は確認できなかった。

#### 掘立柱建物（第36・37図）

掘立柱建物は、B・C各区で2棟ずつ検出された。

主軸は、S B 2のみが東西にとり、他は南北方向である。

規模と形態を見ると、梁行片側が2間なのは共通しており、桁行は、S B 1・3が4間でS B 2・4が3間である。S B 2は西梁に庇を持ち、他の3棟は一方の梁行の中央より片側に寄った位置にピットを持つ。後者は出入り口の構造に基づく配置であると思われる。

S B 1は、柱穴内に淡褐色砂質土と0.5～8cmの小円礫を多く含む。ピットAのように断面図破線のピットは完掘できなかったものである。ピットBは灰褐色土にシラスが混じる埋土上で、検出面中央にわずかに小円礫の集中がある。ピットCは切り合うS K 15よりも新しい。S K 15は同様の円形土坑が比較的新しいので、かなり新しい建物である可能性がある。

S B 3は上坑状の比較的大きな柱穴が並ぶもので、埋土は赤味のある暗灰褐色で散らかく、全体にシラスが混じっている。P P 4・5からは薩摩焼の土瓶が出土し、P P 3では銅製急須（又は銅瓶）が錆びて脆弱な状態で出土した。

#### 配石遺構（第38図）

C区中央西寄りの位置で1基のみ検出された遺構で、扁平な礫を円形に配し、白色の粘土で固めている。

配石の南東側には浅い落ち込みがあり、その底面には灰層が広がっていた。配石部の土坑と切り合わないので一体の遺構である。

埋土は、黒褐色土に白色粘土粒・小ブロックが入るもので、最上層には焼粘土粒や炭化物粒が多く混じる。

配石の中には、石臼の七石1点（125）が転用されている。

#### 出土遺物について

出土遺物を見ると、近世末～近代の薩摩を中心とする南九州産の陶磁器が圧倒的に多く、それに肥前産の陶磁器や、培培などの土器が加わる。これらのうち、ここで報告するのはわずかであるが、時期の確定できるものを見ると、18世紀末～19世紀代を中心としており、中にはわずかながら中世の所産とみられるものも含まれる。

#### 5.まとめ

今回の調査によって、上江地区の古代から近世末にかけての歴史を垣間見ることができた。以下、各遺跡についての成果と特記すべき事項についてまとめてみたい。

#### 歳元遺跡について

歳元遺跡では、狭い調査範囲ながら、中世を中心とする各種の遺構が検出できた。

大型の溝状遺構に連結する土坑については、遺構の報告文中に述べたように、集水や澆灌の役割を果たす可能性もある。さらに、1基検出された「石組遺構」の機能については、近年の類似分析報告文献<sup>1)</sup>によると、住居に付随する「便槽」の他に、「水溜」が想定されている。ただし、歳元遺跡例は内部で火を使用した痕跡があり、文献中では同様の所見のあるものは、肥料を作るために人糞と土・落ち葉・灰などを混ぜ合わせて焼いた可能性があると述べられており、興味深い。

「粘土採掘上坑」<sup>2)</sup>は、法光寺遺跡においても検出されているが、いずれも、わずかながら川土した陶磁器から中世の所産と考えられる。採掘した粘土の用途がど

のようなものかを明らかにする遺構や所見に乏しいが、S Z 1 のような粘土を面的に広げて配す例や、時代は異なるが法光寺遺跡のように柱穴内に充填する例、柱穴埋土に混入する例を参考にすると、例えば、床や壁土といった住居に関係する用途が、まず考えられる。あるいは、土器製作に用いられる場合もあったのかもしれない。

#### 法光寺遺跡について

法光寺遺跡では、当初期待されていた寺院に直接つながる遺構は確認できなかったが、古代の集落の遺構を検出できたのは大きな成果であった。

集落中、ひとときわ大型の掘立柱建物 S B 8 は、墨書き器の出土から、役所的な機能に類する性格の施設の存在を思わせる。

また、包含層からの出土であったが、布目瓦 1 点を検出できたのは幸いであった。近接する寺院の存在と合わせると、古代においてこの地が、小規模ながら、政治的にも交通の面からも一つの要衝に相当していたと推測される。

検出遺構中、溝状遺構 S D 2 はどのような性格の遺構なのか確定できないままであるが、今後、類例の増加を待つ検討していきたい。

#### 中溝遺跡について

中溝遺跡では、概して新しい時代の遺構と遺物が検出されたが、現代に極めて近い時代の所産ながら遺構の性格を明らかにし得なかったことは、近代化の中での生活文化の風化の早さを感じさせる。掘立柱の建物は、現在ではほとんど目にすることがなくなってしまっているが、中溝遺跡の例は、当たり前のようなくつた柱が建っていた時代の最終に近い時期のものではないだろうか。果たしてそれらは住居として利用されることがあったのか、それとも納屋や馬屋のようなものだったのだろうか。

配石遺構については用途が不明だが、この地区に住む発掘作業員の中から「昔の囲炉裏の基礎に似ている」という声があった。また、円形の土坑には便槽も含まれているのではないだろうか。これらが住居に付随するものだとすると、他の遺構との配置関係等にも留意すべきであろう。

こうした疑問については、同時代の調査と類例の増加を待つとともに、民俗学の成果も加えつつ検討することで次第に明らかになるものと期待している。

なお、中溝地区の古事記によると、昭和初期までこ

の地に工場があったというが、それに直接関係する遺構は確認できなかった。

以上、藏元・法光寺・中溝遺跡の調査報告を終えるが、調査期間中には、上江土地改良区理事長の亀園耕作氏をはじめ、地元の方々に終始にわたくちて多大なご協力をいただいた。また、法光寺遺跡の調査においては、宮崎大学柳沢一男先生をはじめ、熊本大学甲元眞之先生、福岡市教育委員会山崎純男氏、鹿児島県埋蔵文化財センター東和幸氏、都城市文化課桑畠光博氏に御教示・御助言をいただいた。ここに記して深謝の意を表したい。

- 1) 豊田裕章「関西における石積み土坑の謎問題」「関西近世考古学研究」、関西近世考古学研究会、1982年。
- 2) 「粘土採掘土坑」と判断する際、同様の遺構を報告した下記の文献を参考にした。  
奥原文雄「粘土および用土の採掘」『考古学叢考』、高橋忠先生頌寿記念論文集刊行会編、1988年。  
『式蔵西分寺開造遺跡の調査』、武東園分寺開造遺跡調査会、1993年。



藏元遺跡 航空写真(北から)霧島連山を望む

图版 2



藏元遗迹 遗构分布状况

A区  
造構検出作業  
(北から)



造構検出状況  
左下にSKIO  
(南から)

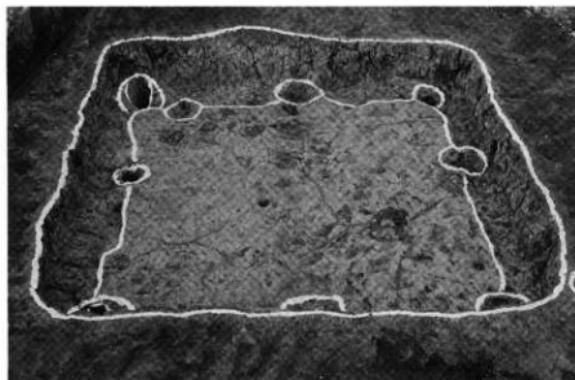


造構掘下げ前の  
分布図作成作業  
左にSK9検出状況



図版 4

藏元遺跡



A区  
遺構完掘状況  
下にSK5  
(南から)

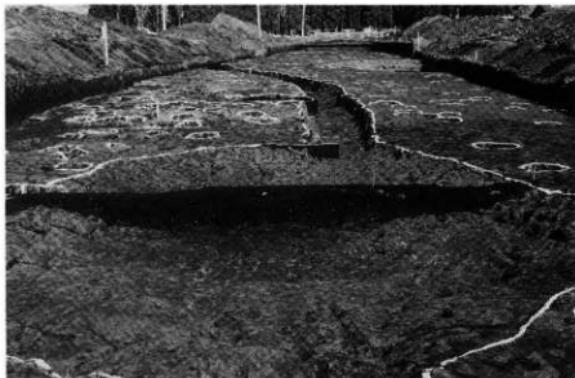


同上  
左下にSK10  
(南から)

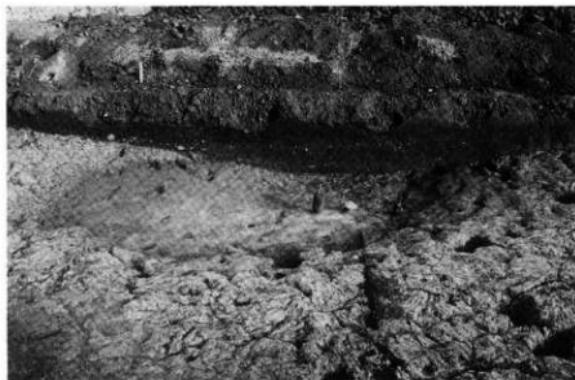


SZ1  
検出状況  
(西から)





S K 8  
埋土の状況  
(南から)



S K 6  
完掘状況  
(西から)



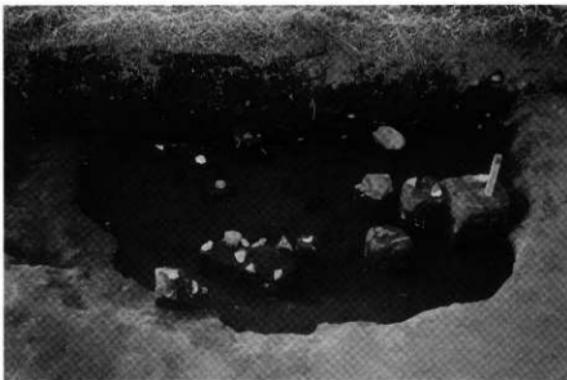
S K 9  
(北西から)



SK11  
完掘状況  
(西から、右が西)



SK12  
焼砾集積状況  
(西から)



SK13  
埋土下層の遺物  
出土状況  
(東から)



S K 10  
完掘状況  
(北西から)



S K 10  
埋土の状況  
(北西から)



S D 3, S D 6  
切りいの状況  
(南から)

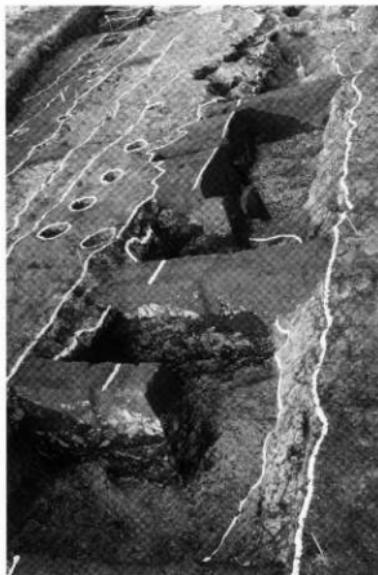




溝状遺構集中部  
S D 7 ~ 15  
検出状況  
(南西から)



同上  
完掘状況  
(南西から)



S K 17+18  
掘下げ状況  
(南東から)

S K 18北側  
西壁崩落状況  
(南東から)

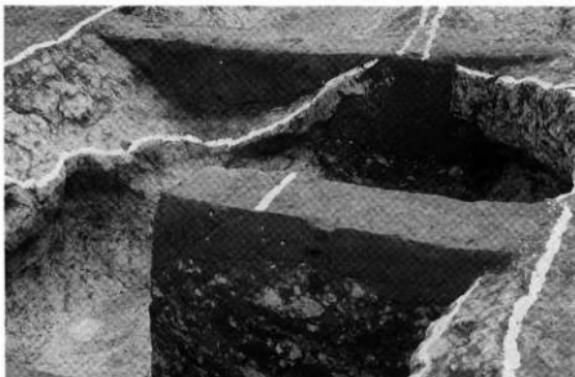


S K 18  
掘下げ状況  
(南東から)

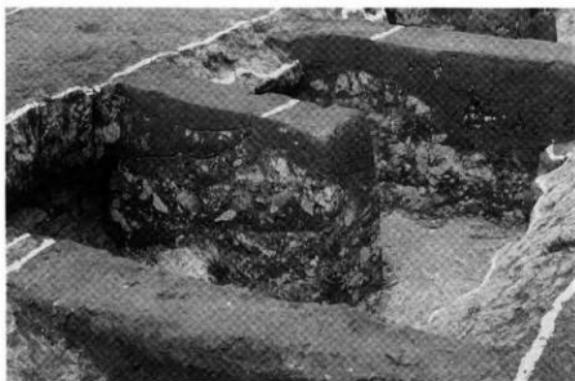


S K 17  
掘下げ状況  
(南東から)





S K 17およびS D 7・8  
(北から)



S K 17  
埋土の状況  
(南東から)



S K 19  
(北から)

藏元遺跡

図版13

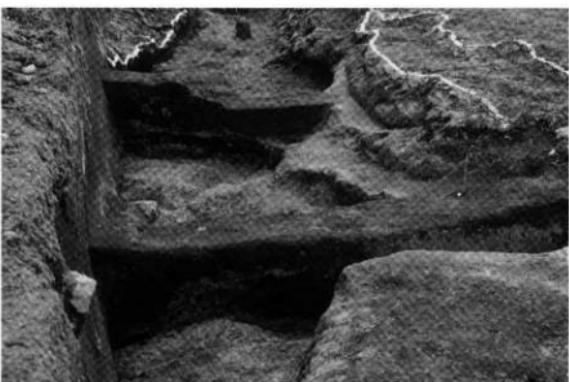
S K 18周辺  
作業風景  
(北から)



同上拡大  
S K 18北側埋土断面  
S D7・8・15切りい状況



S D7・8・15  
北端・屈曲部  
(北から)





溝状造構集中部北半  
SD 9~11  
(北西から)



SD 9 + 11  
掘下げ状況  
(北東から)



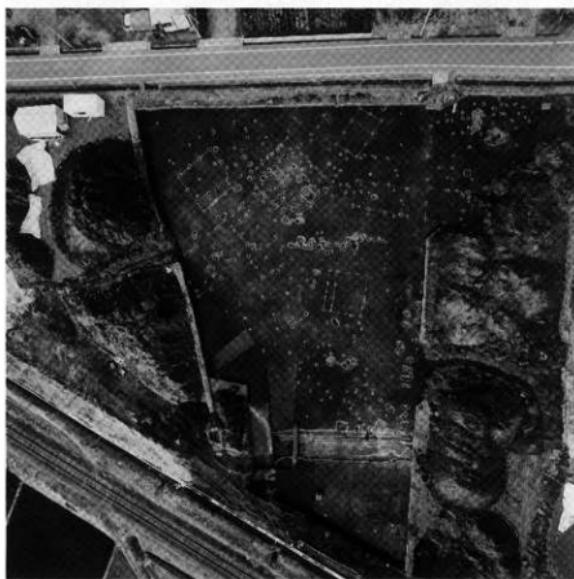
SD 17  
埋土の状況  
(西から)



法光寺遺跡 航空写真（東から） 左に法光寺推定寺域



航空写真  
(南東から)  
川内川を望む



C区  
遺構分布状況

## 法光寺遺跡

図版17

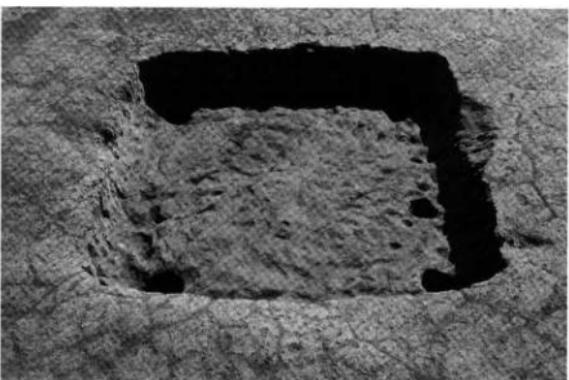
A区  
遺構分布状況  
(南西から)

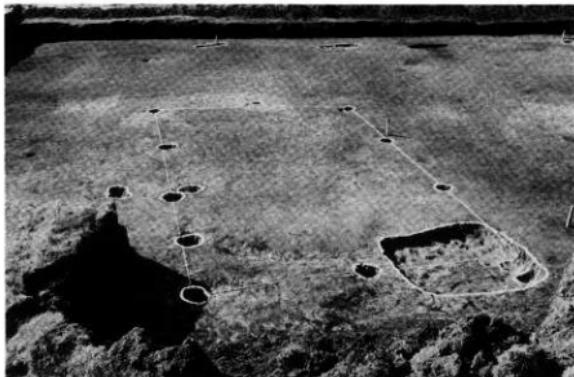


S A I および柱列  
検出状況  
(東から)



S A I  
完掘状況  
(北から)





SB IおよびSK 5  
(東から)



C区北半部  
掘立柱建物群  
(南西から)



C区全景  
(南から)

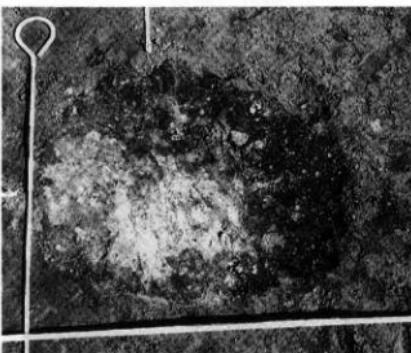
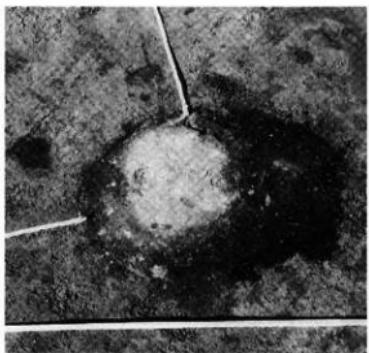
S B 7・10および  
土層断面の状況  
(北東から)



同 左  
(西から)



下：S B 6柱穴  
埋土の状況  
(柱痕部粘土充填)  
左：南側桁西端柱穴  
右：同上東端柱穴





C区  
遺構分布状況  
(南から)



ピット群2  
(北西から)

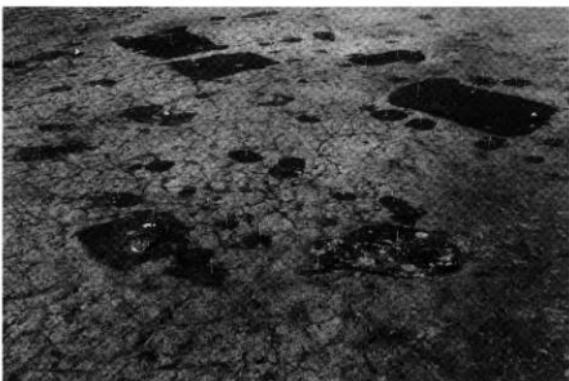


左：ピット群1  
完掘状況  
(東から)

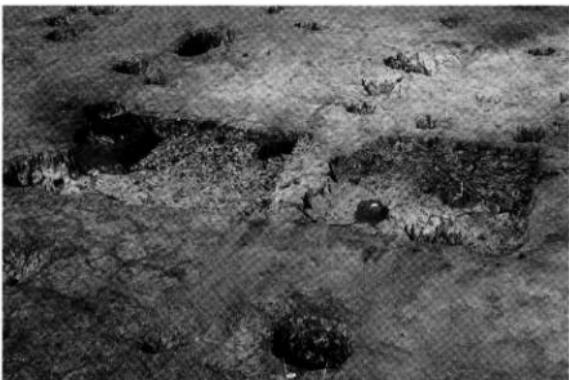


ピット群1 検出状況 (東から)

C区  
方形土坑群  
SK 8~13検出状況  
(南東から)



SK 10・11  
完掘状況  
(南西から)



SK 13  
炭化物出土状況  
(東から)

